宮城県文化財調査報告書第 56 集

北沢遺跡発掘調査概報

昭和 53 年 3 月

宮城県教育委員会
宮 城 県 開 発 公 社

序

社会諸情勢の変化に伴って、第2次産業における従来の都市集中型の生産活動は反省期を迎え、工業用配置等の産業基盤の整備は、経済界にとって重要な課題となっています。また、農業の機械化によって生ずる余剰労働力の有機的活用という面から、工場誘致は地方自治体にとって重要な施策の一つにもなっております。

そのうえ、東北新幹線建設が促進され、一方では、東北自動車道がその機能を発揮し始めると、沿線市町村には、地域の条件に合った工場の誘致ならびに進出が激しくなって参りました。

宮城県開発公社は、県の長期の総合計画にもとずき、村田町ならびに産業界の要請で、村田町北沢地区に59.3haの非用水型企業を中心とした農村型工業団地の造成を計画しました。

計画策定後の昭和51年になって開発地区内に弥生時代の遺跡の所在することが判明しました。この段階から県教育委員会と度重なる協議を行ない、昭和52年5月、発掘調査を実施しました。

その結果、弥生時代の住居跡など大変重要な資料を得ました。これらは、ひとり村田町の文化遺産として重要なだけでなく、東北地方の米作の歴史や、当時の人々の生活を復原するうえで欠くべからざる好資料と考えられます。

ここに調査の成果がまとめられ、発刊される運こびとなりました。調査に当った、宮城県文化財保護課の職員と協力をいただいた地域住民の方々に、深く感謝の意を表しますとともに、この報告書が広く県民の皆様に管用されることを願って序といたします。

昭和53年3月

宮城県開発公社理事長　**高　橋　彦　治**

例　言

1. 本書は宮城県経済発展長期の総合計画にもとづく村田工業団地造成に伴う北沢遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査期日：昭和52年5月30日～昭和52年7月29日
3. 調査主体者：宮城県教育委員会･宮城県開発公社
4. 調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
5. 調査対象面積：23,000㎡　発掘面積：17,000㎡
6. 調査協力機関：村田町教育委員会
7. 本書に使用した1/25,000地形図(1/10,000空中写真)は建設省国土地理院長の承認を得て複製したものである。承認番号:昭53東複、第98号また1/2,000･1/500地形図は宮城県開発公年で作成したものである。
8. 本書において土色については「新版標準土色帳」(小山、竹原1967)を使用し、土性については国際土壌学会の粒形区分を参照した。
9. 本書の編集執筆は宮城県教育庁文化財保護課職員の協議を得て斎藤吉弘、真山悟が担当した。

発掘調査参加者名簿

文化財保護課職員:斎藤吉弘　丹羽茂　阿部恵　真山悟　一条孝夫　千葉宗久

地元協力者(アイウエオ順)

＜男＞岩間勝径　岩間兵吉　大沼善八　大島泰三郎　柏倉留治郎　草川信男　佐藤久治郎　佐藤幸三郎　佐藤幸造　佐山勇　佐山喜八郎　高橋克彦　高橋倉四郎　高橋幸一　高橋繁　高橋久雄　葉坂哲男　兵藤正博　平岡酉　三浦菊治　三浦誠一　三浦寅治　村上尚

＜女＞安達きよ子　岩間さだ子　大沼かね子　大沼コハル　大沼たか子　鎌田はな子　草川さき子　草川利子　後藤ミエ子　佐藤あき子　佐藤イチ　柴崎とき子　菅原くらよ　鈴木もと　高橋邦子　高橋たみ子　長谷部ちよ　平岡ひで　真壁きみよ　村上かつみ

整理協力員

石川小夜里　伊藤淳子　尾上幸子　劔持みどり　興梠知里　佐藤幸子　佐藤美智子　西沢直子

目　　次

序
例　言
Ⅰ．調査に至る経過 1
Ⅱ．位置と環境 2
1．自然的環境 2
2．歴史的環境 2
Ⅲ．調査の方法と経過 8
1．調査の方法 8
[調査対象範囲] 8
[調査区の設定] 8
2．調査の経過 8
Ⅳ．調査の成果 9
1．基本層序 9
2．遺構とその出土遺物 11
1．土壙 11
2．住居跡 15
3．土壙および住居跡以外の出土遺物 32
Ⅴ.考察 41
1．遺構 41
(1)土壙 41
(2)竪穴住居跡 42
2．遺物 44
(1)縄文土器 44
(2)弥生土器 44
(3)石器 46
(4)土師器 46
(5)須恵器 47
(6)赤焼土器 47
(7)その他の遺物 48
4．遺構の性格と年代 48
(1)土壙 48
(2)住居跡 49
5．遺跡の構成 49
6．まとめ 49
引用・参考文献(引用順) 50

Ⅰ．調査に至る経過

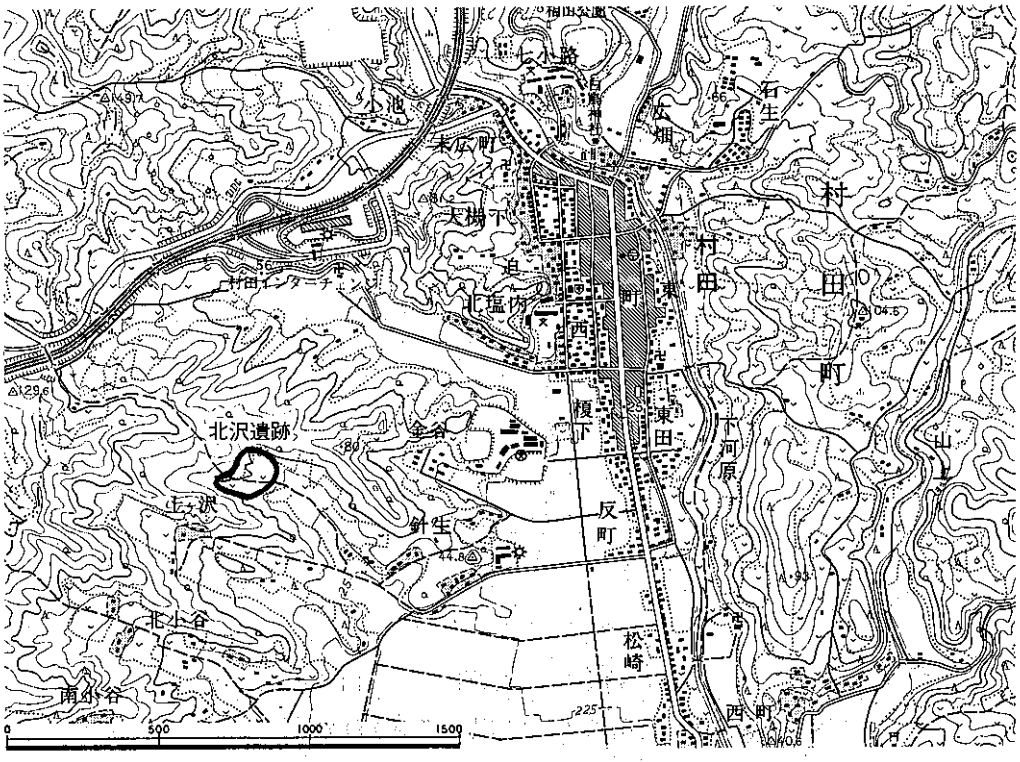
昭和 47 年「県経済発展長期の総合計画」にもとづいて、村田町北沢地区に非用水型工業団地の造成計画が策定され、昭和 48 年 5 月から団地の買収が行なわれた。昭和 50 年 3 月には農村地域工業導入促進地域の指定をうけている。

ところが、昭和 51 年になって開発予定地域の南部の舌状小丘陵斜面の畑地の部分で弥生土器が発見され、この部分が遺跡であることが確認された。

この遺跡の取り扱いについて、昭和 52 年 3 月 4 日以降開発公社と県教育委員会との間で再三にわたって協議を行なった。3 月 17 日には関係者立会いのうえ、現地で遺跡の範囲や性格の把握のための調査を行なった。

その結果、遺跡は 23,000 ㎡に及ぶこと、弥生土器のほかに土師器の出土もあり複合遺跡であること、遺跡の中心部に調整池等の施設の建設予定地内にふくまれることなどが判った。

その後の協議でこの遺跡の保護、保存のためには発掘調査が必要であることを確認し、5 月 21 日、宮城県開発公社理事長と宮城県知事との間で委託契約書が締結され、5 月 23 目～27 日まで諸準備を行ない 5 月 30 日から発掘調査に入った。



第１図　北沢遺跡の位置

Ⅱ．位置と環境

1．自然的環境

北沢遺跡は、村田町役場の南西約 1.5 ㎞、柴田郡村田町字北沢 85～90 に位置している。

村田町を地形的にみると、北・東・西の三方を高館丘陵に囲まれ、中央部に扇状地性低地(村田盆地)が南に向かって広がっている。高館丘陵を開析する荒川、新川は低地を形成しながら、ほぼ北から南に流れている。

町をはさんで東西の丘陵は南にのびており、その標高は 150～200m である。(町の西側の丘陵を西丘陵と仮称する)。西丘陵の西には白石盆地(円田盆地)、東には村田盆地が形成されており、西丘陵から派生した小丘陵が二つの盆地に数多く張り出している。これらの小丘陵の中で、村田盆地の針生地区にのびる標高 40～80m の小丘陵がある。この地区は南から北西方向に入りこむ谷となっており、谷の中央部を北沢川が流れている。谷の両側は比較的平坦な斜面となっており、この斜面に本遺跡が立地している。本遺跡の微地形を観察すると、北沢川の北側にはさらに小さな沢が入りこみ、この間に平坦面をもつ舌状小丘陵が形成されている。遺跡内の標高は高い部分で 50m、低い部分で 35m となっている。

2．歴史的環境

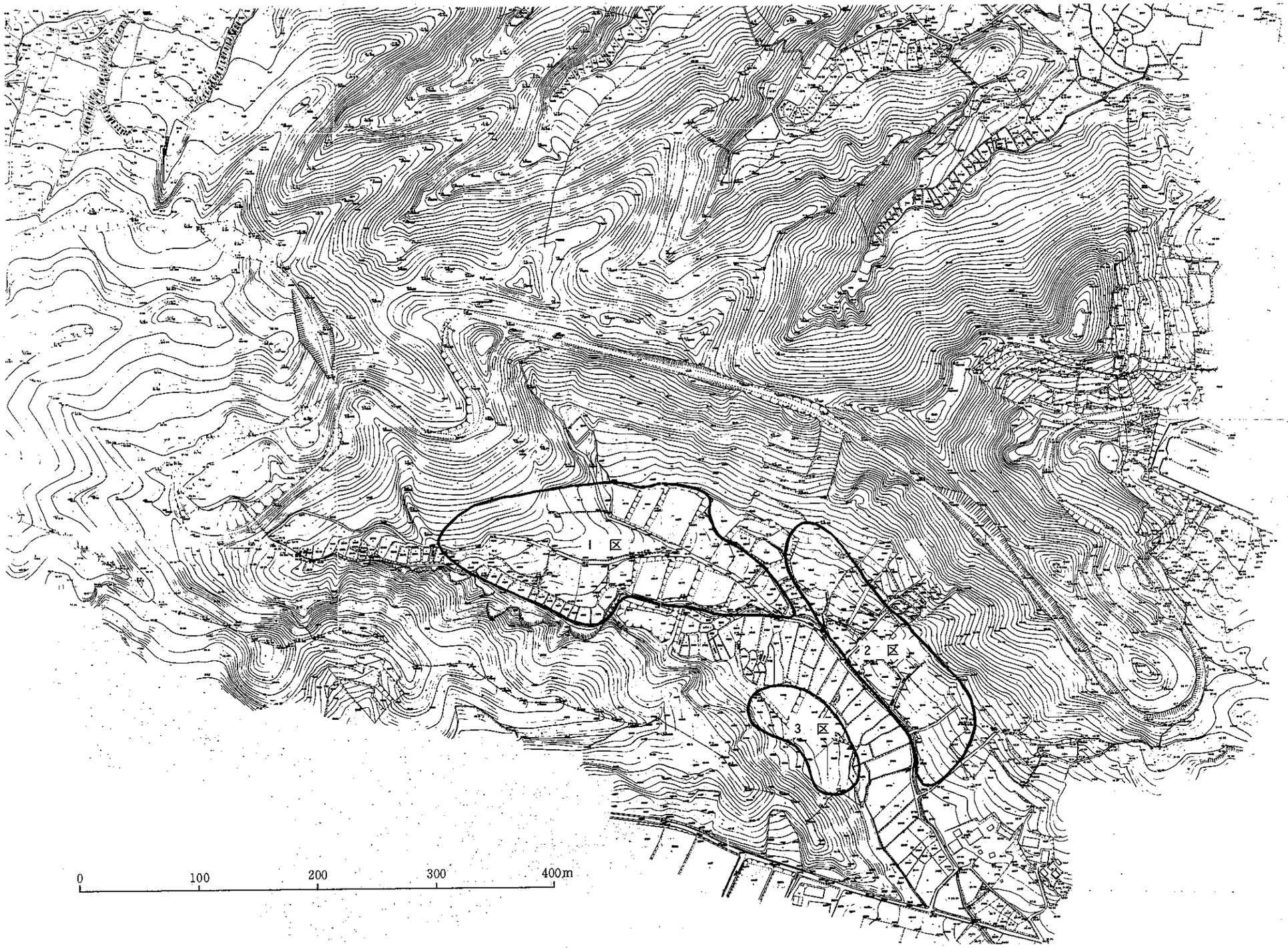
村田町内には、今回調査した北沢遺跡を含め、確認されている遺跡は 90 ヶ所である(宮城県教委：1976、村田町史編纂委：1977)。これらの遺跡の分布をみると荒川、新川、菅生川流域の丘陵、台地などに立地している。ここでは、北沢遺跡の歴史的環境を、荒川および新川流域の遺跡について概観してみたい。

現在、旧石器時代までさかのぼる遺跡は発見されていないので、縄文時代以降の遺跡についてのべる。

縄文時代：集落跡や遺物包含層は、35 ヶ所確認されている。早期の遺跡には、川村開拓遺跡があり、「素山式」の土器片と石鏃、石匙が発見されている。中期の遺跡には、相山遺跡、鶏権現遺跡などがあり、「大木 8 式、9 式」の土器が発見されている。後期、晩期の遺跡には、発掘調査が行なわれた東足立遺跡がある。住居跡 3 軒、炉跡 6 基、埋甕 1 基などが発掘され、石鏃、石匙、石皿、磨石、ペンダントなどが出土している(宮教委：1972)。

弥生時代：遺物包含地は、27 ヶ所確認されている。蔵本遺跡の他、北沢遺跡と同時期と考えられている相山遺跡、塩内遺跡、上ヶ沢遺跡、北割山遺跡、山の入遺跡、入遺跡などがある。特に入遺跡では石包丁の破片と「円田式」の土器片が発見されている。

古墳時代：集落跡 1 ヶ所、遺物包含地 7 ヶ所、古墳 24 ヶ所の遺跡が確認されている。古墳と



第２図　遺跡周辺の地形図

第３図　北沢遺跡周辺の航空写真

しては高塚古墳(方墳 1、前方後円墳 6、円墳 11)と横穴古墳(4)がある。下の内囲前方後円墳、愛宕山前方後円墳(県史跡)からは円筒埴輪が発見されている。横穴古墳では、中山囲横穴古墳群の 3 号墳、龍泉院横穴古墳群の 4 号墳などが調査されている。日向前遺跡では古墳時代の住居跡が一軒発見されている。

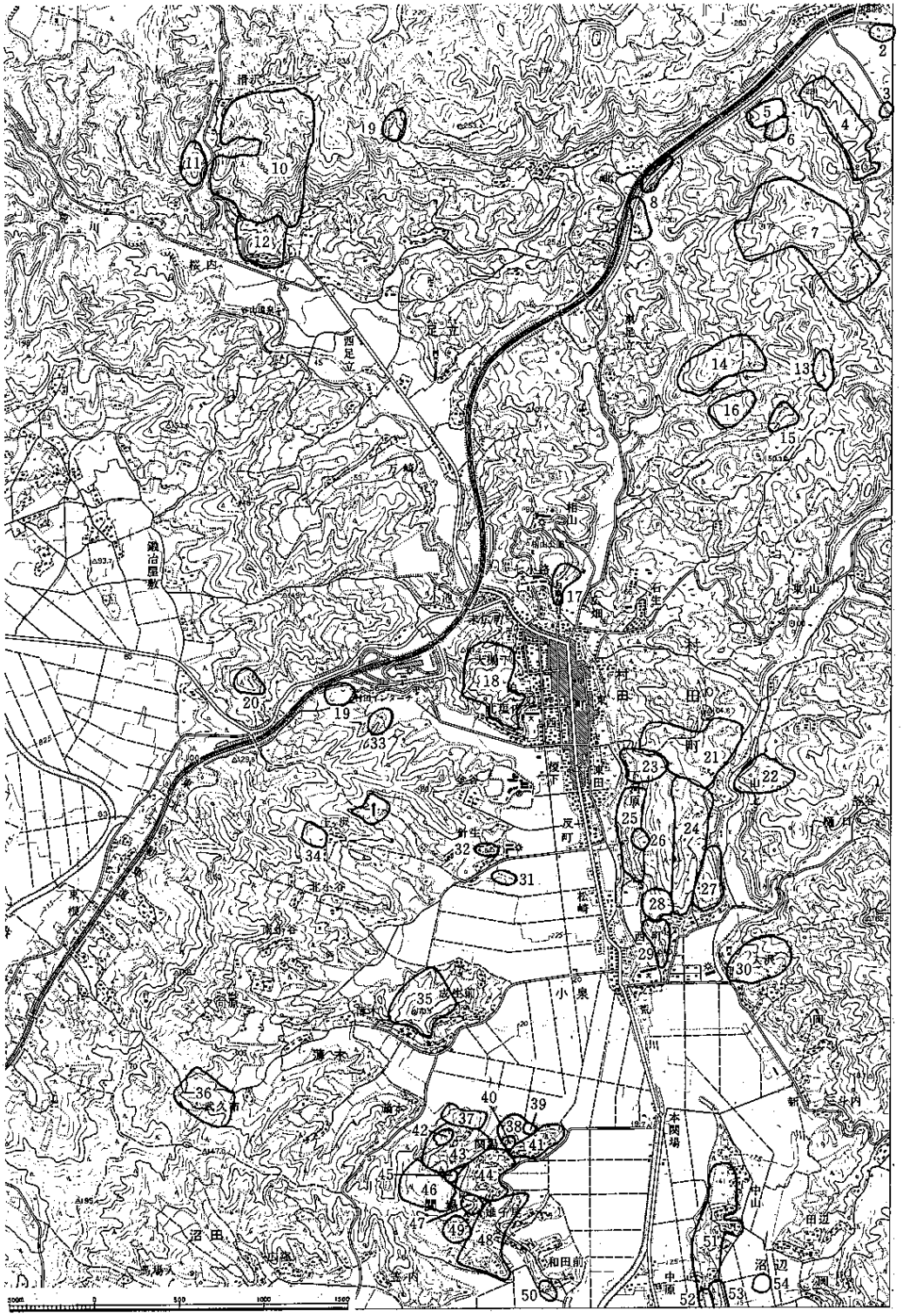
奈良～平安時代：集落跡、遺物包含地、窯跡など 26 ヶ所が確認されている。西原遺跡では住居跡 4 軒、東足立遺跡では住居跡 2 軒が調査されている。

中世以降：中世から近世にかけての遺跡には、城館跡 13、経塚 1 がある。城館跡は、その大部分が丘陵上に立地している。

以上、周辺の遺跡について概観した。このことから、北沢遺跡周辺の丘陵、台地には、縄文時代以来、各時代の遺跡が存在するといえる。

第Ⅰ表　村田町遺跡地名表

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	北沢遺跡	丘陵中腹	包含地	弥生(後)	28	寺の上遺跡	丘陵斜面	包含地	弥生・奈良・平安
2	三本楢窯跡	丘陵斜面	窯跡	平安	29	古館横穴古墳群・古館跡			古墳(後)・中世
3	菖蒲沢遺跡	丘陵麓	包含地	縄文	30	入遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・弥生(後)
4	無刀関A遺跡	丘陵	〃	縄文・奈良・平安	31	針生古墳	台地	前方後円墳	古墳(中)
5	稲荷山遺跡	丘陵中腹	〃	縄文	32	針生A古墳	丘陵端	円墳	古墳(後)
6	無刀関遺跡	丘陵斜面	生産遺跡(製鉄)		33	塩内遺跡	丘陵麓	包含地	弥生(後)
7	姥ケ懐遺跡	丘陵	包含地	縄文(中)・古代	34	上ケ沢遺跡	〃	〃	弥生
8	東足立(乗越囲)遺跡	丘陵斜面	集落跡・包含地	縄文(後・晩)・弥生・平安	35	薄木城跡	丘陵	城館	中世
9	上太平遺跡	丘陵中腹	包含地	縄文(?)	36	武久市遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・弥生(後)
10	星野城跡(星直城跡)	丘陵	城館	中世	37	宮ノ下遺跡	丘陵麓	〃	古墳・奈良
11	花館跡	〃	〃	中世	38	鎌倉遺跡	丘陵斜面	〃	奈良・平安
12	小館跡	〃	〃	室町	39	雲南権現古墳	丘陵麓	円墳	古墳
13	金口山B遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(?)・弥生・奈良・平安	40	経壇	丘陵中腹	経塚	中世
14	大塚遺跡	丘陵	〃	縄文	41	峰崎遺跡	丘陵	包含地	古墳・奈良・平安
15	金口山A遺跡	丘陵斜面	〃	縄文(?)・弥生・奈良・平安	42	蔵本古墳群	丘陵中腹	円墳	古墳
16	大成田遺跡	丘陵中腹	〃	縄文(中)	43	蔵本遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・弥生(中・後)・古代
17	相山遺跡	丘陵麓	〃	縄文(中)・弥生(後)	44	高木遺跡	〃	〃	縄文・弥生・奈良・平安
18	村田城跡(古館)	丘陵	城館	中世	45	蛇口古墳	丘陵中腹	円墳	古墳
19	西原遺跡	丘陵中腹	集落跡・包含地	縄文・平安	46	県中跡・愛宕山古墳	丘陵	前方後円墳	古墳(中)
20	北割山遺跡	丘陵頂	包含地	縄文・弥生	47	龍泉院横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)
21	山ノ入遺跡	丘陵	〃	弥生(後)・古墳	48	信太田遺跡・雉子尾遺跡	丘陵 〃	包含地 〃	奈良・平安 〃
22	百々目木遺跡	丘陵中腹	〃	縄文	49	関場城跡(和田館跡)	〃	城館	室町
23	月本遺跡	丘陵斜面	〃	縄文・弥生	50	塔ケ崎遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
24	丹野山囲遺跡	〃	〃	弥生	51	六斗内遺跡	分離丘陵	包含地	弥生
25	中ノ内遺跡	〃	〃	縄文・弥生(後)・奈良・平安	52	中山囲横穴古墳群	分離丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)
26	下ノ内囲古墳	丘陵中腹	前方後円墳？	古墳	53	中山遺跡	分離丘陵	包含地	奈良・平安
27	小泉城跡(四郎館)	丘陵	城館	室町	54	小塚古墳	沖積平野	前方後円墳？	古墳



第4図　周辺の遺跡

Ⅲ．調査の方法と経過

1．調査の方法

〔調査対象範囲〕これまで、本遺跡の舌状小丘陵の南斜面の畑地から数片の弥生土器や土師器が採集されていたことや、丘陵の地形等の観察から、付近にこれらの遺物に関連する遺構の存在が予想されていた。このことから、今回の調査では、舌状小丘陵の平坦面とその周囲の緩斜面の全域を１区、沢の北側に面する斜面を２区、沢の南側の斜面を３区として３つの地区を調査対象とした。

〔調査区の設定〕調査区は大きく西から東へ傾斜しているため、地形を考慮に入れて 2 つの基準点Ａ・Ｂを定めた。ＡとＢを結ぶ基準線を設け、それを基準として対象地区に 3m 単位のグリッドを組んだ。地区名は、東西方向をアラビア数字・南北方向をアルファベットで示した。なお南北方向は、60m を単位として大きなブロック　(A・B・C・D)　にした。

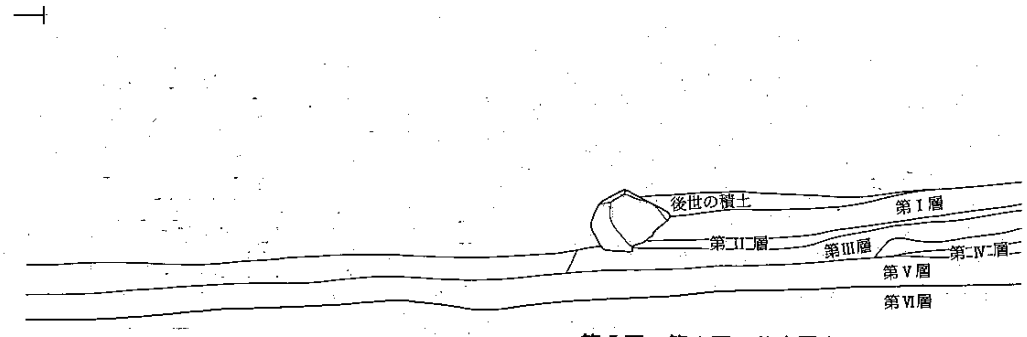
発掘に際しては、遺構がどのように分布しているかを検討するために 3m×9m のトレンチをあわせて、東西、もしくは南北方向に 3～9m おきに設定した。なお発掘の具体的な方法については、従来文化財保護課が行なっているものに従った。

2．調査の経過

発掘調査は昭和 52 年 5 月 30 日に始まった。調査対象面積は約 23,000 ㎡である。

第１区の西側緩斜面で AL 区に、南緩斜面では AN 区に 3m×9m のトレンチを設定し粗掘りを始めた。その結果、AL－106～118 区と AI－160～165 区で弥生土器を含む黒色土(基本層序第Ⅱ層)、南緩斜面の褐色土(基本層序第Ⅲ層)で住居跡を確認した。

この時点で、南側緩斜面の盛土が 1m ほどあったので、重機を入れて除去することにした。また重機を入れるのと併行して、第２区、第３区のトレンチ調査を行ない、さらに１区のトレソチの拡張を行なった。



第５図　第Ⅰ区の基本層序(AMライン)

調査の結果、第 1 区の平坦面は開田のため一部破壊を受けていたが、南斜面は旧地形を残していた。AI－106 区の平坦面、及び斜面に移行する部分では土壙 6 基、竪穴住居跡 2 軒を確認した。AJ-110 区を中心とする南緩斜面では第Ⅲ層上面より竪穴住居 3 軒を確認した。この段階で実測を開始した。

第 2 区では古い沢を埋積している層から弥生土器･石鏃･土師器が出土した。その周囲は、開墾のため攪乱されており、遺構は検出されなかった。

第 3 区では、第Ⅱ層より土師器・須恵器が出土し、地山面で溝を確認したが他の遺構は確認できなかった。

以上の経過を経て 7 月 29 日、調査を終了した。なお、地元住民に、調査の結果を公開する目的で、7 月 25 日、現地報告会を行なっている。

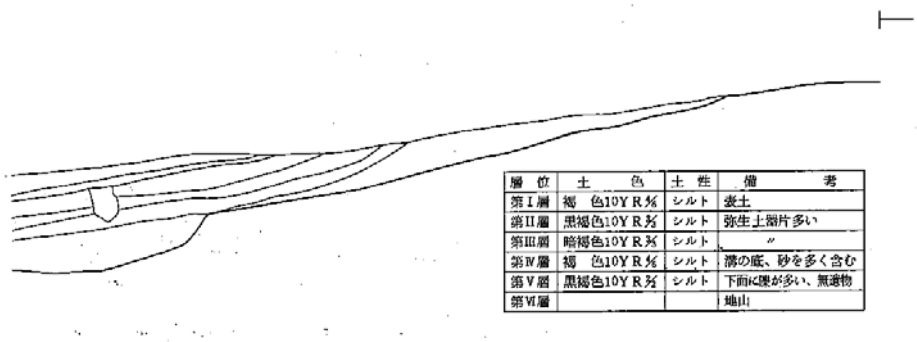
Ⅳ. 調査の成果

1. 基本層序

第 1 区

第Ⅰ層は耕作土であり全域にわたって分布している。削平や盛土されているところ以外は、層の厚さも 10～20 ㎝とほぼ一定している。出土遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器などがあるほか、ごく最近のものもみられる。

第Ⅱ層は黒褐色のシルト層で東の緩斜面および、西側斜面の凹地に堆積している。厚さは 10～20 ㎝である。東の緩斜面は、削平を受けているため第Ⅱ層の分布は Ⅰ－160 区を中心として 100 ㎡の範囲であった。西側斜面では、東南に長い楕円形の広がりをもち J－110 区を中心として 500 ㎡の範囲に広がっている。層中には、弥生時代の遺物と縄文土器片を若干含んでいる。これらの遺物は層理面に対して不規則な状態で出土している。



層位	土色	土性	備考
第Ⅰ層	褐 色10YR⅝	シルト	表土
第Ⅱ層	黒褐色10YR⅜	シルト	弥生土器片多い
第Ⅲ層	暗褐色10YR⅜	シルト	〃
第Ⅳ層	褐 色10YR⅝	シルト	溝の底、砂を多く含む
第Ⅴ層	黒褐色10YR⅜	シルト	下面に穴が多い、無遺物
第Ⅵ層			地山

第Ⅲ層は暗褐色のシルト層で南緩斜面に堆積している。厚さ 10～20 ㎝でＪ－140 区を中心として 3,600 ㎡の範囲に広がっている。平安時代の第 1 住居跡、第 5 住居跡はこの上面で確認した。

第Ⅳ層は褐色シルト層で南緩斜面に堆積して、遺物は含まない。

第Ⅴ層は黒褐色シルト層で南緩斜面に堆積している。大きな礫を含む層で遺物は含まない。

第 2 区

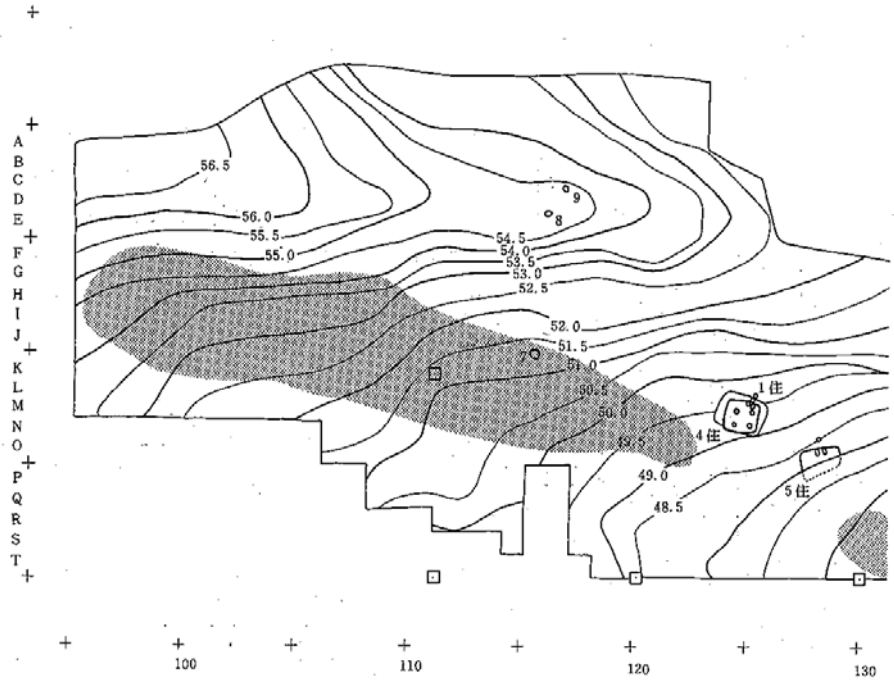
全体に開墾のため攪乱を受けており、表土だけであるが、DB－225 から DC－225 区で埋没している古い沢が確認された。その堆積土は 5 層に細別される。第Ⅴ層中より弥生土器片、土師器等が出土している。

第 3 区

第Ⅰ層は耕作土であり、斜面全体に分布している。須恵器片をわずかに含む層である。層の厚さは約 20 ㎝でほぼ一定している。

第Ⅱ層は黒褐色のシルト層で斜面の上の方に堆積しており、中に砂を含んでいる。厚さ約 20 ㎝で DJ－189 区を中心とした 100 ㎡の範囲に分布している。土師器と須恵器を若干含む層で遺物の出土状況は層理面に対して不規則である。

第Ⅲ層は暗褐色のシルト層で第Ⅱ層とほぼ同じ範囲に堆積している。遺物は含まない。



第 6 図　遺構配置図および

2. 遺構とその出土遺物

1. 土壙

土壙は、10 基検出されている。舌状小丘陵の南東部の平坦面から緩斜面に移行する部分に 6 基(1～6)、北西部の平坦面と斜面の部分に 4 基(7～10)と 2 ヶ所に分布している。

第 1 土壙

〔確認面〕　確認面は第Ⅱ層中である。

〔重複〕　なし

〔形態、大きさ〕　平面形は、楕円形で、長軸 63 cm、短軸 53 cm、深さ 8 cmである。断面形は浅い皿状をしている。

〔使用痕跡〕　堆積土上面は火熱を受けた焼け面である。

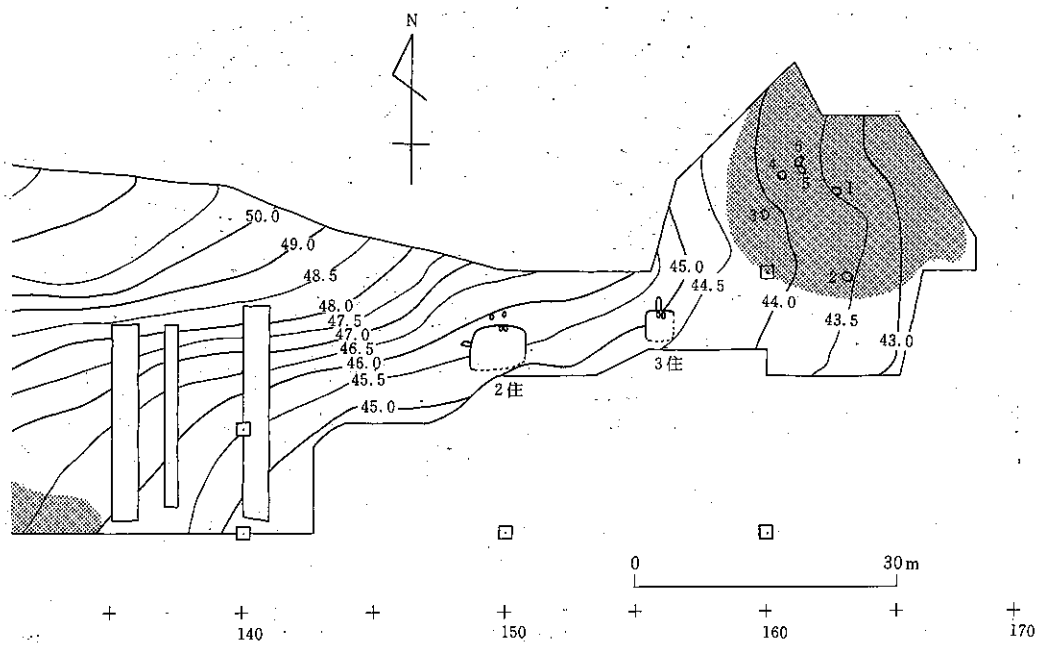
〔堆積土〕　堆積土は 1 層で焼土と木炭を含む層である。

〔出土遺物〕　堆積上中より弥生土器片が出土している。

第 2 土壙

〔確認面〕　確認面は地山面である。

〔重複〕　なし



第 2 層の分布範囲（第Ⅰ区）

〔形態、大きさ〕　平面形は楕円形で、長軸約 93 ㎝、短軸約 80 ㎝、深さ 18 ㎝である。底面がほぼ平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。

〔使用痕跡〕　壁面はわずかに焼けているが、底面は焼けていない。

〔堆積土〕　堆積土は多量の木炭や焼土を含む層で、3 層に細別される。

第 3 土壙

〔確認面〕　確認面は地山面である。

〔重複〕　なし

〔形態、大きさ〕　攪乱を受けて一部破壊されているが、残存状況より、楕円形であると考えられる。現存長は、長軸 50 ㎝、短軸 38 ㎝、深さ 16 ㎝である。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。

〔使用痕跡〕　壁の上部が焼けている。側壁下半部と底面は焼けていない。

〔堆積土〕　褐色シルトで層中に焼土を含む

第 4 土壙

〔確認面〕　確認面は地山面である。

〔重複〕　なし

〔形態、大きさ〕　平面形は長方形で、長軸 108cm、短軸 95 ㎝、深さ 26 ㎝である。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上る。

〔使用痕跡〕　壁はかなり火熱を受けて焼けている。底面は、わずかに焼けている。

〔堆積土〕　2 層に分かれ第 2 層では多量の木炭と焼土を含む。

〔出土遺物〕　堆積上中から弥生土器片が出土している。

第 5 土壙

〔確認面〕　確認面は地山面である。

〔重複〕　第 6 土壙の一部を切っている。

〔形態、大きさ〕　平面形は長方形で、長軸 108 ㎝、短軸 98 ㎝、深さ 30 ㎝である。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。

〔使用痕跡〕　底面と壁が火熱を受けて焼けているが、特に壁下端から中頃までが著しい。

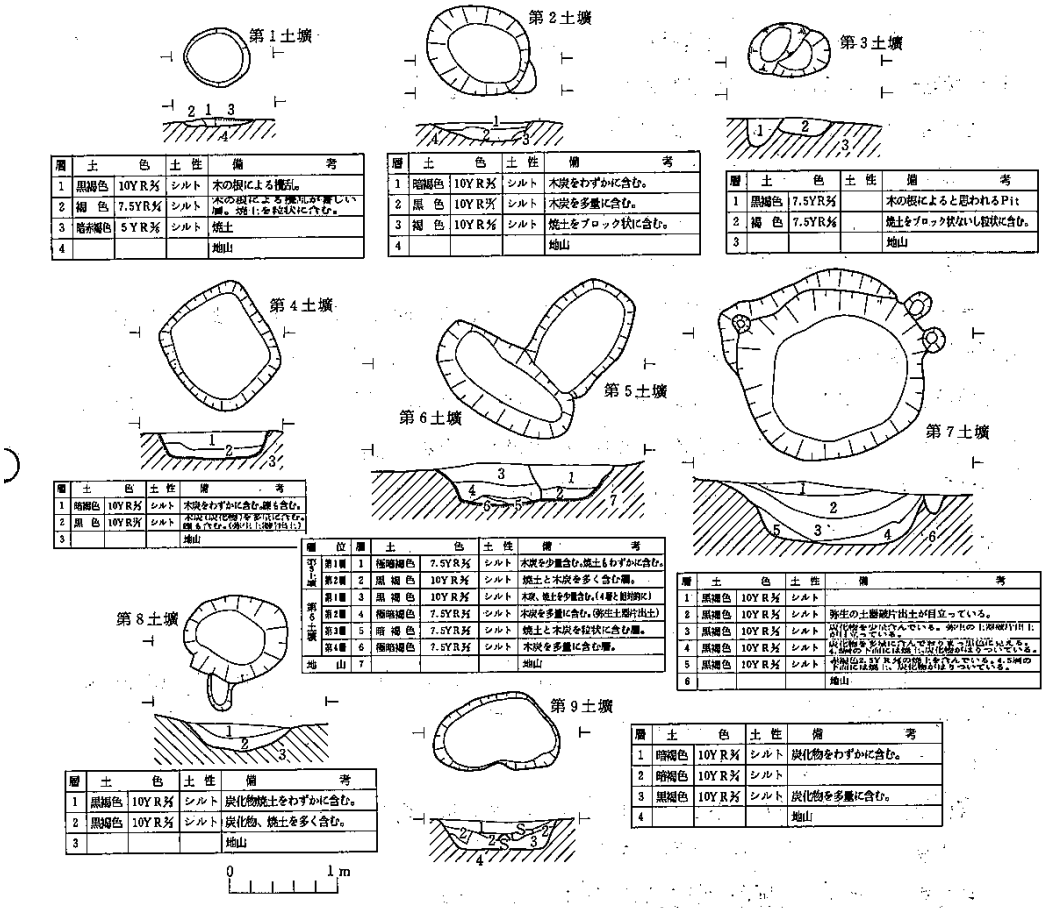
〔堆積土〕　2 層に分かれ第 2 層では多量木炭と焼土を含む。

第 6 土壙

〔確認面〕　確認面は地山面である。

〔重複〕　第 5 土壙によって壁の一部が切られている。

〔形態、大きさ〕　平面形は長方形で、長軸 I45 ㎝、短軸 52 ㎝、深さ 40 ㎝である。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上る。



層	土色		土性	備考
1	黒褐色	10YR3/4	シルト	木の根による攪乱。
2	褐色	7.5YR4/4	シルト	木の根による攪乱が著しい層。焼土を斑状に含む。
3	暗赤褐色	5YR3/6	シルト	焼土
4				地山

層	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR3/4	シルト	木炭をわずかに含む。
2	黒色	10YR2/1	シルト	木炭を多量に含む。
3	褐色	10YR4/6	シルト	焼土をブロック状に含む。
4				地山

層	土色		土性	備考
1	黒褐色	7.5YR3/4		木の根によると思われるPit
2	褐色	7.5YR4/6		焼土をブロック状ないし斑状に含む。
3				地山

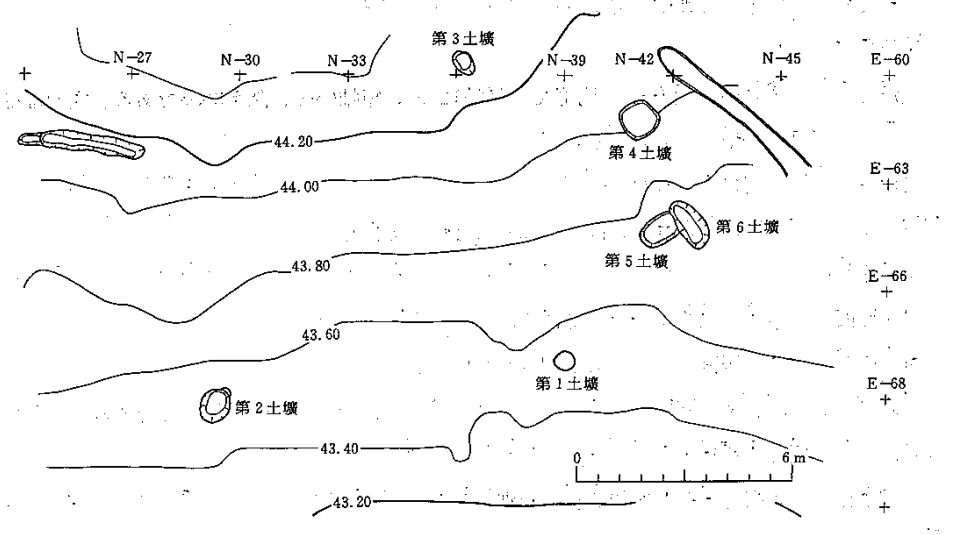
層	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR3/4	シルト	木炭をわずかに含む。焼土も含む。
2	黒色	10YR2/1	シルト	木炭を多量に含む。(4層と類似層)
3				地山

層	土色		土性	備考
1	黒褐色	10YR3/4	シルト	
2	黒褐色	10YR3/4	シルト	弥生の土器破片出土が目立っている。
3	黒褐色	10YR3/4	シルト	炭化物を少量にふくんでいる。弥生の土器破片出土が目立っている。
4	黒褐色	10YR3/4	シルト	炭化物を多量にふくんでおり、第一層に近いものである。4、5層の下層には焼土、炭化物がはっきりついている。
5	黒褐色	10YR3/4	シルト	赤褐色5YR4/6の焼土をふくんでいる。4、5層の下層には焼土、炭化物がはっきりついている。
6				地山

層位		層	土色		土性	備考
第3土壙	第1層	1	極暗褐色	7.5YR3/4	シルト	木炭を少量含む。焼土もわずかに含む。
	第2層	2	黒褐色	10YR3/4	シルト	焼土と木炭を多く含む層。
第6土壙	第1層	3	黒褐色	10YR3/4	シルト	木炭、焼土を少量含む。(4層と類似層)
	第2層	4	極暗褐色	7.5YR3/4	シルト	木炭を多量に含む。(弥生土器片出土)
	第3層	5	暗褐色	7.5YR3/4	シルト	焼土と木炭を斑状に含む層。
	第4層	6	極暗褐色	7.5YR3/4	シルト	木炭を多量に含む層。
地山		7				地山

層	土色		土性	備考
1	黒褐色	10YR3/4	シルト	炭化物焼土をわずかに含む。
2	黒褐色	10YR3/4	シルト	炭化物、焼土を多く含む。
3				地山

層	土色		土性	備考
1	暗褐色	10YR3/4	シルト	炭化物をわずかに含む。
2	暗褐色	10YR3/4	シルト	
3	黒褐色	10YR2/3	シルト	炭化物を多量に含む。
4				地山



第7図　土壙と配置図

〔使用痕跡〕　底面と壁が火熱を受けている。

〔堆積土〕　4 層に細別され多量の木炭と焼土を含む。

〔出土遺物〕　第 2 層から弥生土器片が出土している。

第 7 土壙

〔確認面〕　確認面は第Ⅳ層上面である。

〔重複〕　なし

〔形態、大きさ〕　平面形は円形で長・短軸 175 ㎝、深さ 54 ㎝である。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上る。

〔使用痕跡〕　底面と壁下端から中頃までわずかに焼けている。

〔堆積土〕　6 層に細別され部分的に多量の木炭と焼土を含む。

〔出土遺物〕　第 1、2、3 層から弥生土器の破片が出土している。

第 8 土壙

〔確認面〕　確認面は地山面である。

〔重複〕　なし

〔形態、大きさ〕　平面形は楕円形で、長軸 100 ㎝、短軸 85 ㎝、深さ 27 ㎝である。底面は丸味をもち、壁はゆるやかに立ち上る。

〔使用痕跡〕　特にみられない。

〔堆積土〕　2 層に分かれ第 2 層では木炭と焼土を多量に含む。

第 9 土壙

〔確認面〕　確認面は地山面である。

〔重複〕　なし

〔形態、大きさ〕　平面形は楕円形で、長軸 120 ㎝、短軸 65 ㎝、深さ 30 ㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上る。

〔使用痕跡〕　特にみられない。

〔堆積土〕　3 層に細別され、部分的に木炭と焼土を含む。

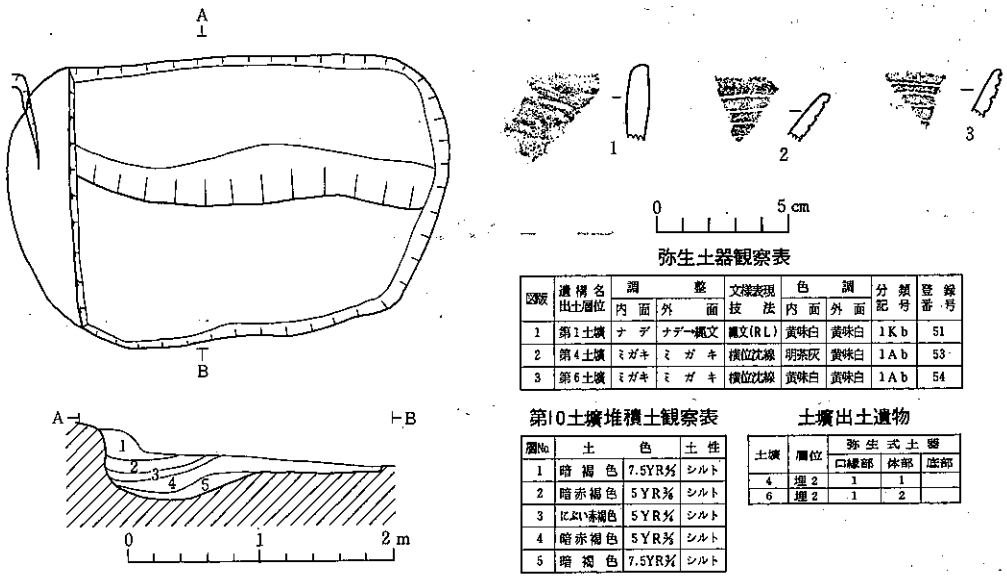
第 10 土壙

〔確認面〕　確認面は第Ⅲ層上面である。

〔重複〕　第 5 住居跡により西辺が切られている。

〔形態、大きさ〕　平面形は楕円形で、長軸 3.4m、短軸 2.1m、深さ約 60 ㎝である。底面は比較的平坦で壁は急に立ち上る。

〔堆積土〕　暗褐色シルト層で 5 層に細別される。



弥生土器観察表

図版	遺構名 出土層位	調整 内面	調整 外面	文様表現 技法	色調 内面	色調 外面	分類記号	登録番号
1	第1土壙	ナデ	ナデ→縄文	縄文(RL)	黄味白	黄味白	1Kb	51
2	第4土壙	ミガキ	ミガキ	横位沈線	明茶灰	黄味白	1Ab	53
3	第6土壙	ミガキ	ミガキ	横位沈線	黄味白	黄味白	1Ab	54

第10土壙堆積土観察表

層No	土色		土性
1	暗褐色	7.5YR3/3	シルト
2	暗赤褐色	5YR3/6	シルト
3	にぶい赤褐色	5YR4/4	シルト
4	暗赤褐色	5YR3/3	シルト
5	暗褐色	7.5YR3/4	シルト

土壙出土遺物

土壙	層位	弥生式土器 口縁部	弥生式土器 体部	弥生式土器 底部
4	埋2	1	1	
6	埋2	1	2	

第8図　土壙・出土遺物

2. 住居跡

第1住居跡

〔**確認面**〕東・北・西の各辺は第Ⅲ層上面で、南の辺は第Ⅴ層上面で確認された。

〔**重複**〕第4住居跡と重複している。第4住居跡を切っていることから、第4住居跡が廃絶され、埋まった後に第1住居跡が構築されたものと思われる。

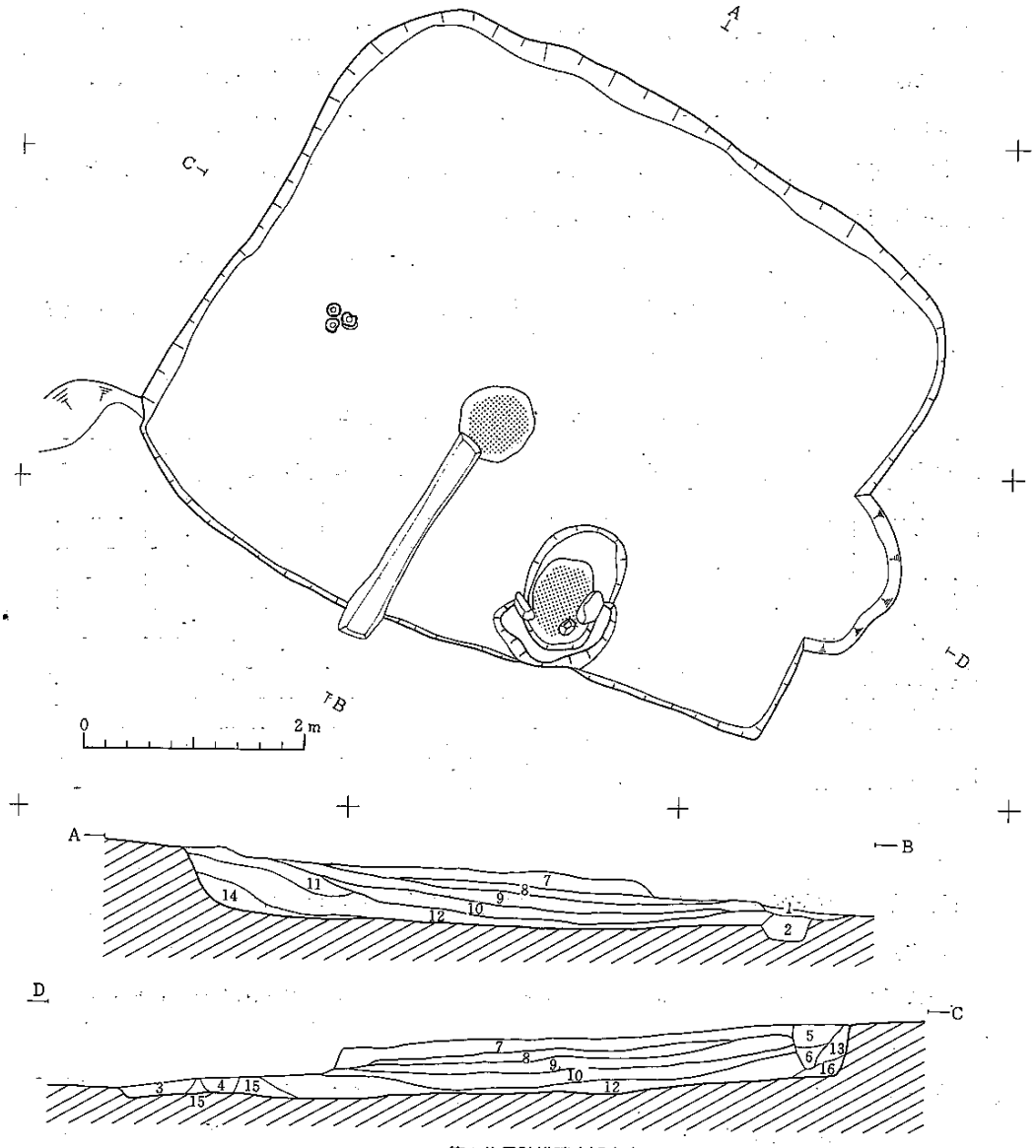
〔**平面形**〕平面形は長方形で長軸6.1m、短軸5.3mである。

〔**堆積土**〕堆積土は5層に大別することができる。第1層は褐色シルトでしまりがなく住居中央に堆積している。第3層は暗褐色シルトで住居中央に堆積しているが、第1層より分布範囲がせまい。第3層(黒色シルト層)、第4層(黒褐色シルト層)は壁際を除き住居跡全体に分布している。第5層は色調の違いはあるが全体に暗褐色シルト層で住居跡全体に分布し、壁際で特に厚い。

〔**壁**〕4辺とも壁が残っている。北壁は第Ⅲ層、第Ⅳ層、地山まで掘り込んで壁としている。東と西壁は第Ⅲ層から第Ⅳ層まで掘り込んで壁としている。南壁は第Ⅴ層を掘り込んで壁としている。西壁は床面から急な角度で立ち上り、他の壁はゆるやかに立ち上る。壁高は、保存のよい北壁で約55㎝である。

〔**床面**〕床の北半分は地山で、南半分は第4住居跡の堆積土の上に貼床をしたものである。底面の中央は、ややくぼんでいる。

〔**柱穴**〕確認できなかった。



第Ⅰ住居跡堆積土観察表

層位	層No.	土層	土性	備考
攪乱	1	褐色(10YR4/4)	シルト	
	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
	3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
	5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
	6	黒色(10YR2/1)	シルト	
第1層	7	褐色(10YR4/4)	シルト	間隙性(微分草木根入りとむ)
第2層	8	暗褐色(10YR3/4)	シルト	〃
第3層	9	黒色(10YR1/1)	シルト	〃 (僅かにパサパサしている)
第4層	10	黒褐色(10YR3/2)	シルト	僅かに粘性あり
第5層	11	褐色(10YR4/4)	シルト	
	12	暗褐色(10YR3/4)	シルト	粘性あり、にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトブロック含む
	13	褐色(10YR4/4)	シルト	粘性あり
	14	褐色(10YR4/4)	シルト	粘性あり
	15	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	僅かにパサパサしている
	16	暗褐色(10YR3/4)	シルト	粘性あり

第9図 第Ⅰ住居跡

〔**カマド**〕全長 1.7m、最大幅 1.1m のカマドが南壁中央東寄りにつくりつけられている。構造的には焚口部、燃焼部からなり「∩」字形をしている(煙道部、煙出し部は確認できなかった)。焚口部から燃焼部の底面は浅い皿状をしている。燃焼部底面の奥壁側に角礫が立っており、支脚と思われる。主体部内側の長さは 85 cm、幅は 45 cm、また、壁高は 16 cmである。燃焼部側壁と奥壁底面が火熱を受けて硬化し赤褐色となっている。

〔**焼け面**〕住居中央やや南寄りに楕円形(60 cm×50 cmの範囲)の焼け面がある。

〔**出土遺物**〕弥生土器、土師器坏・甕・赤焼土器が出土している。各々の数量および特徴については、第 2 表、第 10・11 図に示した。

第 2 表　第 I 住居跡出土遺物破片集計表

出土層位	弥生土器			土師器甕			土師器坏		
	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部
カマド		2		2	14		8	10	
床	1	5			39	2		3	
第 5 層		18			58			9	10
第 4 ～ 5 層							1		
第 4 層		3		1	62	1	2	11	2
第 3 層	1	4			26		14	12	2
第 2 ～ 5 層							1	4	
第 2 層						1			
第 1 層		1			15				1
第 X 層		6	1		4			1	

第 2 住居跡

〔**確認面**〕住居跡の北半は地山面で、南平は第Ⅲ層上面で確認された。

〔**重複**〕なし

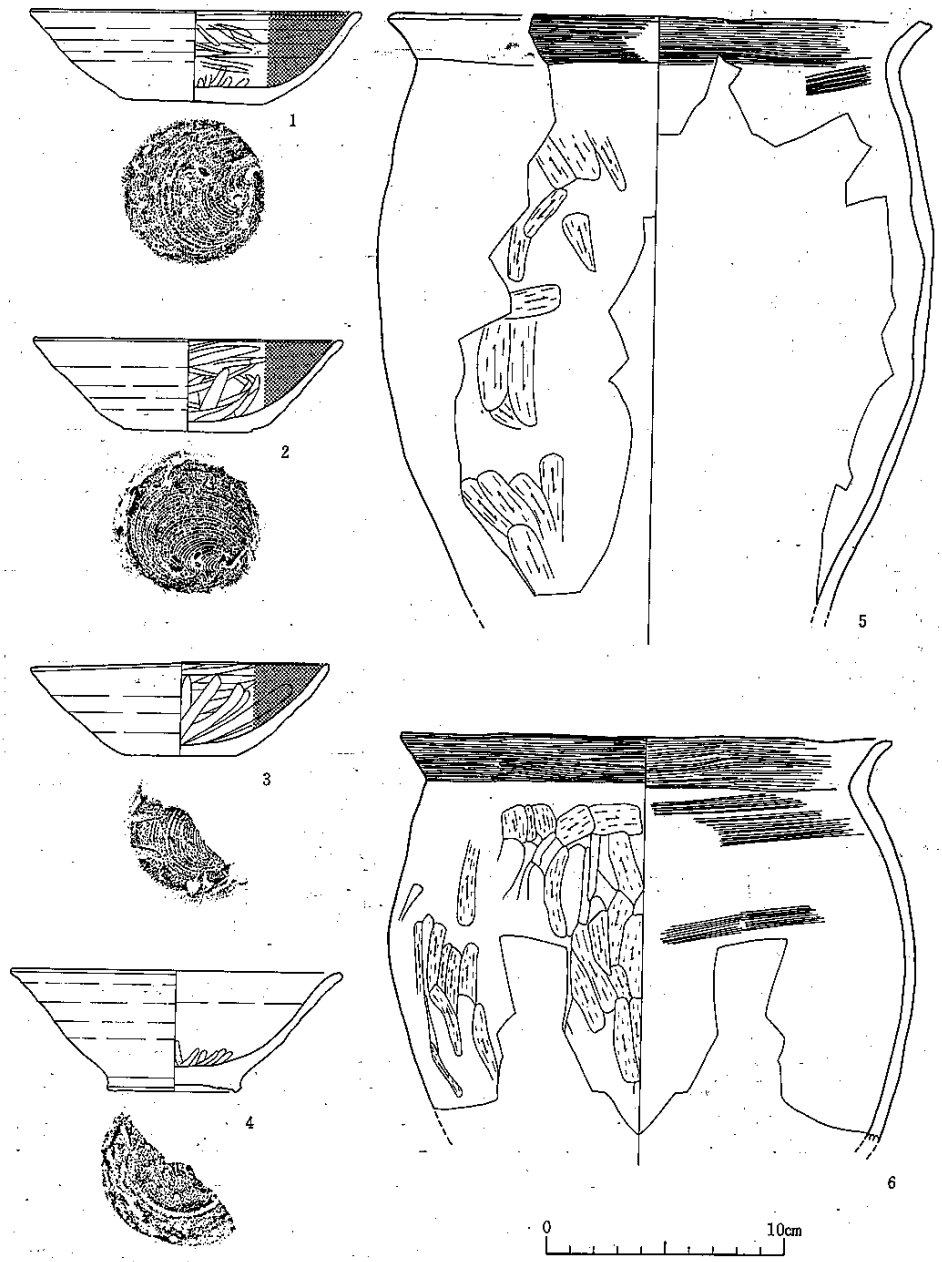
〔**平面形**〕削平により南東隅が不明であるが、残存している壁の状況から平面形は長方形で、長軸 6.1m、短軸 5.1m と推定される。

〔**堆積土**〕堆積土は 5 層に大別される。第 1 層は褐色シルト層で住居跡の南半に堆積している。第 2 層は黒褐色シルトで住居の中央部に堆積している。第 3 層は暗褐色のシルト層で住居中央に広く堆積している。第 4 層は褐色シルト層で中央部にはみられず、壁の周辺に堆積している。第 5 層は暗褐色シルト層で、壁際に堆積している。

〔**壁**〕残存する壁の北半は地山を、南半は第Ⅲ層を掘り込んで壁としている。北壁は急に立ち上るが、その他はゆるやかである。残存高は残りのよい北壁で 55～60 cmである。

〔**床面**〕床面はわずかに凹凸があり、南側にわずかに傾斜している。北側は地山で硬く、南側は褐色の貼床で比較的軟かい。

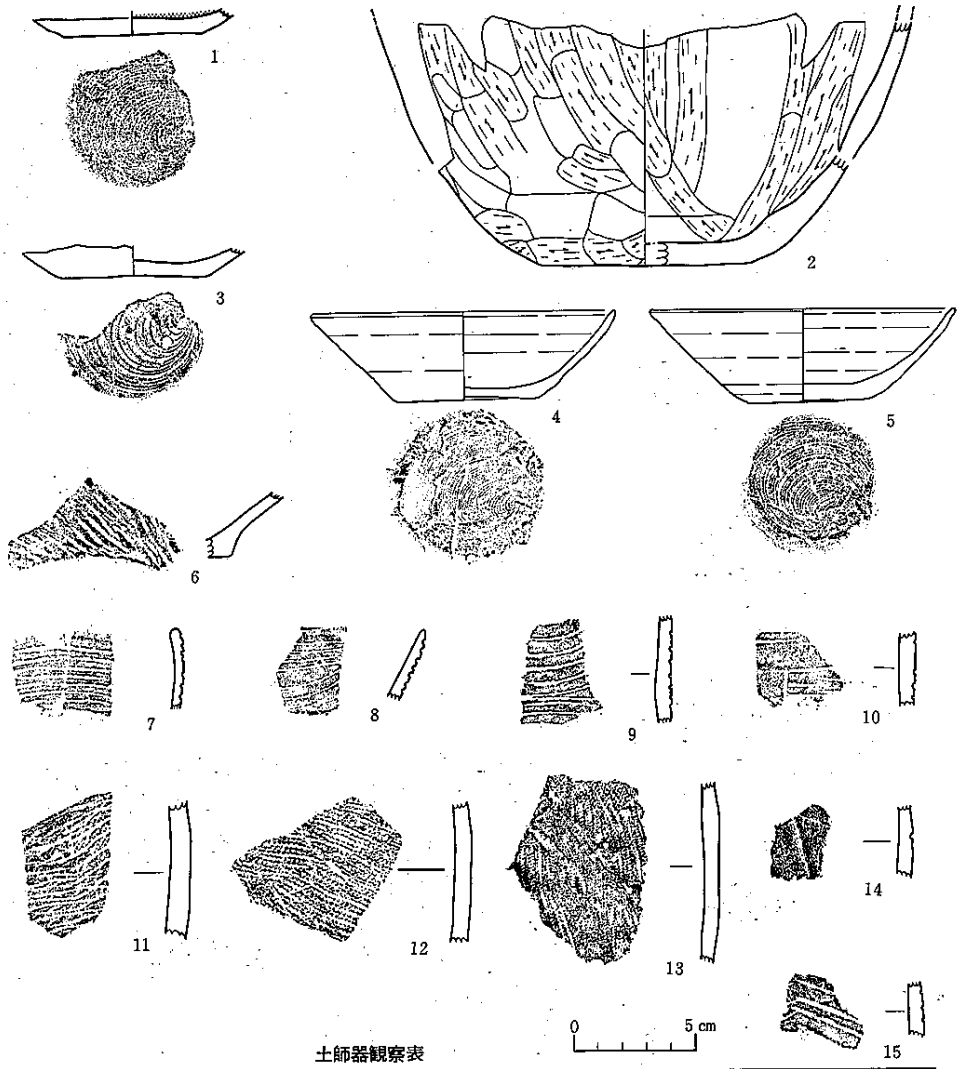
〔**柱穴**〕不明である。



土師器観察表

図版	出土層位	種別	調 内面	整 外面	切離し	器高	口径	体径	底径	分類番号	登録番号
1	カマドー1層	土師器（坏）	ミガキ・黒色	ロクロ	回転糸切り	4.0	14.0		5.8	B－Ⅲ	6
2	C－床面	土師器（坏）	ミガキ・黒色	ロクロ	回転糸切り	3.9	13.0		5.4	B－Ⅲ	5
3	床面	土師器（坏）	ミガキ・黒色	ロクロ	回転糸切り	4.0	12.6		4.6	B－Ⅲ	2
4	カマドー崩落土	土師器（坏）（高台付坏）	ミガキ	ロクロ	回転糸切り→高台付	5.1	14.1		5.7	B－Ⅳ	1
5	B－カマド壁1	土師器（甕）	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	不明	不明	22.6	23.2	不明	A－1	23
6	B－カマド	土師器（甕）	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	不明	不明	20.7	22.0	不明	A－1	21

第10図　第1住居跡出土遺物〔Ⅰ〕



土師器観察表

図版	出土層位	種別	内面	外面	切り離し	器高	口径	体径	底径	分類番号	登録番号
1.	B－第4層	土師器(坏)	ミガキ・黒色	ロクロ	回転糸切り	不明	不明		5.6	B－III	19
3	－第X層	赤焼土器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	不明	不明		5.9		18
4	C－床直	赤焼土器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	3.6	12.7		5.9		3
5	C－床直	赤焼土器(坏)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	3.9	12.7		5.1		4
2	カマド－崩落土	土師器(甕)	ヘラケズり	ヘラケズり	ヘラケズり	不明	不明	不明	8.6		22

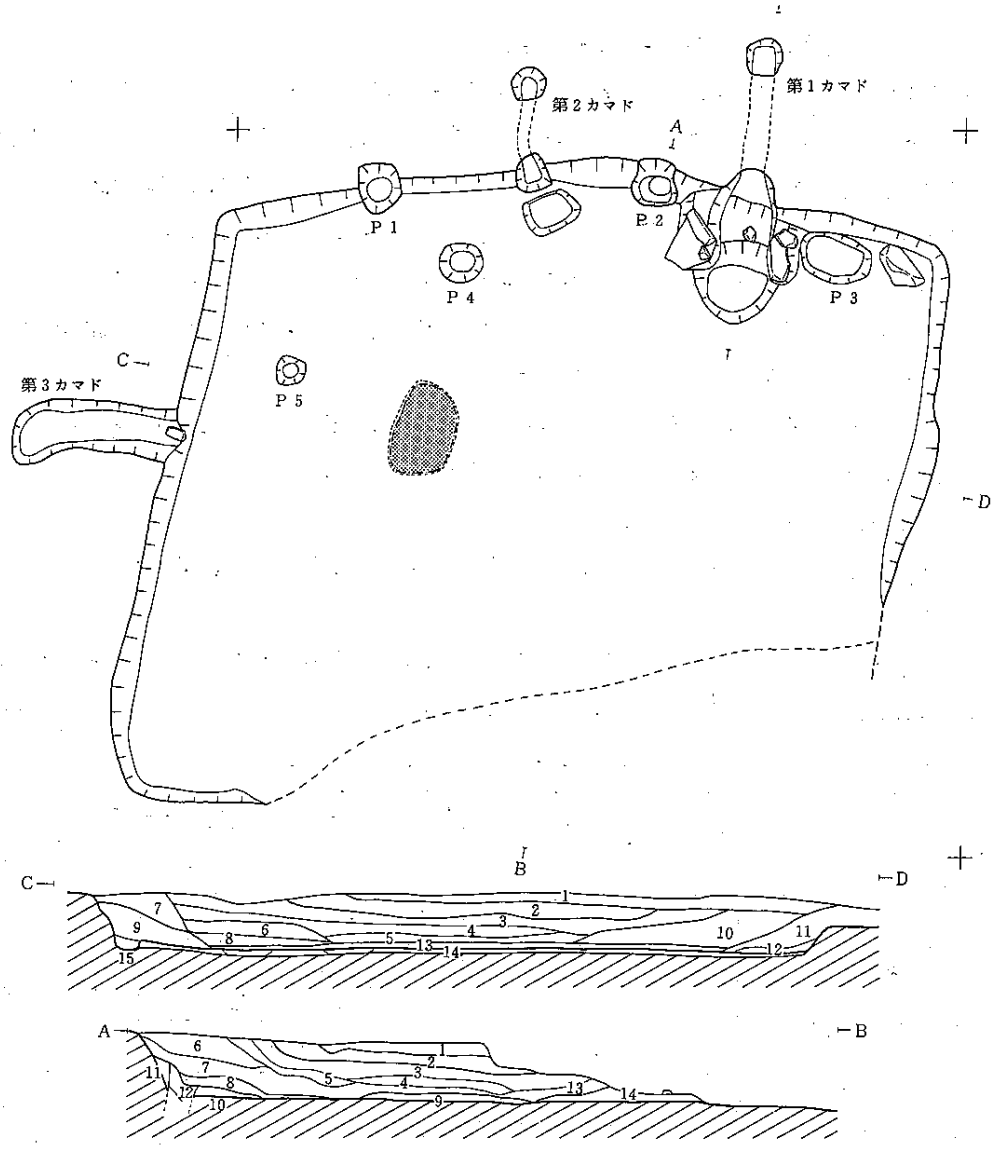
弥生土器口縁部観察表

図版	地区・層位	調整 内面	調整 外面	文様表現技法	色調 内面	色調 外面	分類記号	登録番号
9	1住D－埋5	ミガキ	ミガキ	弧状沈線	明るい茶色	黄味白	IC2	258
10	1住 カマド内	ナデ	ミガキ	横位沈線・縦位沈線	暗い黄茶	明るい茶灰	IH2	260
11	1住D－埋5	ナデ	付加縄文(LR)		明るい茶色	にぶい橙	IIIJ1	1075
12	1住C－床	ナデ	付加縄文(LR)		灰味黄茶	明るい茶灰	IIIJ1	1065
13	1住C－床	ナデ	付加縄文(RL)		にぶい橙	にぶい橙	IIIJ1	1078
14	1住A－埋5	ナデ	ミガキ	弧状沈線	明るい黄橙	明るい茶灰	IC2	257
15	1住A－埋3	ナデ	ミガキ	斜位沈線	灰味黄橙	明るい茶灰	IB2	255

弥生土器体部観察表

図版	出土層位	口縁形態	調整 口唇部	調整 口縁部 内面	調整 口縁部 外面	文様表現技法 口縁部	色調 内面	色調 外面	分類番号	登録番号
7	C-第3層	内弯	ナデ	ミガキ	ミガキ	横位＋斜行沈線	黄色	明るい黄橙	IEb	55
8	C-D-床面	外傾	ナデ	ナデ	ミガキ	横位沈線	明るい茶色	にぶい橙	IAb	56

第11図　第1住居跡出土遺物〔II〕



第2住居跡堆積土観察表

層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	
第2層	2	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	
第3層	3	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
	4	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	
	5	褐色(7.5YR4/4)	シルト	
	6	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
	7	褐色(7.5YR4/3)	シルト	
第4層	8	褐色(7.5YR4/4)	シルト	炭化物、焼土を含む
第5層	9	褐色(7.5YR3/4)	シルト	
	10	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	
	11	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
	12	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	
	13	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼土、炭化物を多量に含む
床	14	明褐色(7.5YR5/4)	シルト	床
	15	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	炭化物、焼土を含む

第12図　第 2 住 居 跡

〔**カマド**〕新旧、3基のカマドが確認された。

第1カマドは、全長2.4m、最大幅1.1mで北壁中央東寄りにつくられている。構造的には焚口部、燃焼部、煙道部、煙出し部からなる。焚き口部と燃焼部に礫と粘土を積み上げて構築している。焚口部から燃焼部にかけての底面は皿状となっている。燃焼部内の長さは1m、幅は40㎝である。燃焼部の北側の段を境にして煙道を掘り抜いている。煙道部は長さが1.4m、幅20㎝である。先端に煙り出しの穴がある。燃焼部は、底面、側壁とも赤褐色に焼けている。

第2カマドは、北壁中央西寄りに位置し、地山を掘り抜いた長さ1m、幅20㎝の煙道部が残っている。煙道部の底面と壁が赤褐色に焼けている。

第3カマドは、西壁中央に位置し、長さ1.4m、幅40㎝の煙道部だけが残っている。煙出しから燃焼部方向へ傾斜している。壁上端の周囲が暗褐色に焼けている。

〔**焼け面**〕床面中央に長軸80㎝、短軸50㎝の焼け面がある。

〔**その他の施設**〕第1カマド東側に、楕円形で長軸60㎝・短軸40㎝・深さ20㎝のピットが検出されている。

〔**出土遺物**〕弥生土器片、土師器、須恵器片、砥石、鉄製紡錘軍が出土している。各々の数量および特徴については、第3表、第13・14図に示した。

第3表　第2住居跡出土遺物破片集計表

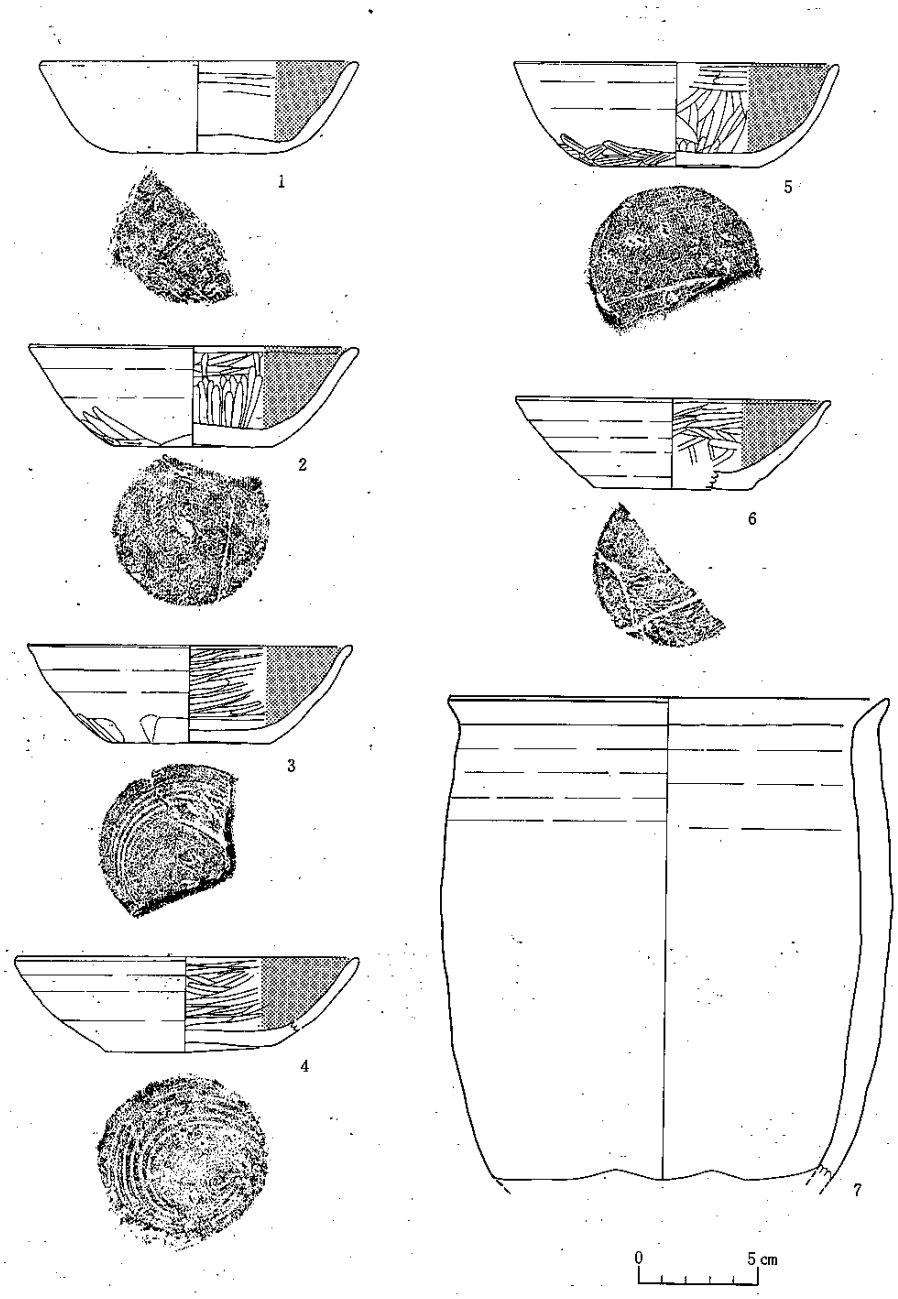
		弥生土器			土師器甕			土師器坏		
		口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部
カマド			1					5	3	
カマド(煙道)					3	49				
西カマド						29			1	
カマドわき周辺					6	18	1			
床			4		12	125	3	8	5	
								3	4	
第4	10					4		4		
	8	1			1	2		1	3	
第3	6					4			1	
	5		3		4	59	1		2	1
	4		1		2	21		2	2	
	3		1							
第2					2	20			2	
第1			1			15			1	
X			2						2	

第3住居跡

〔**確認面**〕確認面は地山面である。

〔**平面形**〕南東隅が削平と後世のピットによる攪乱のため不明である。残存している壁の状態から平面形は正方形で長軸3.6m、短軸3.5mと推定できる。

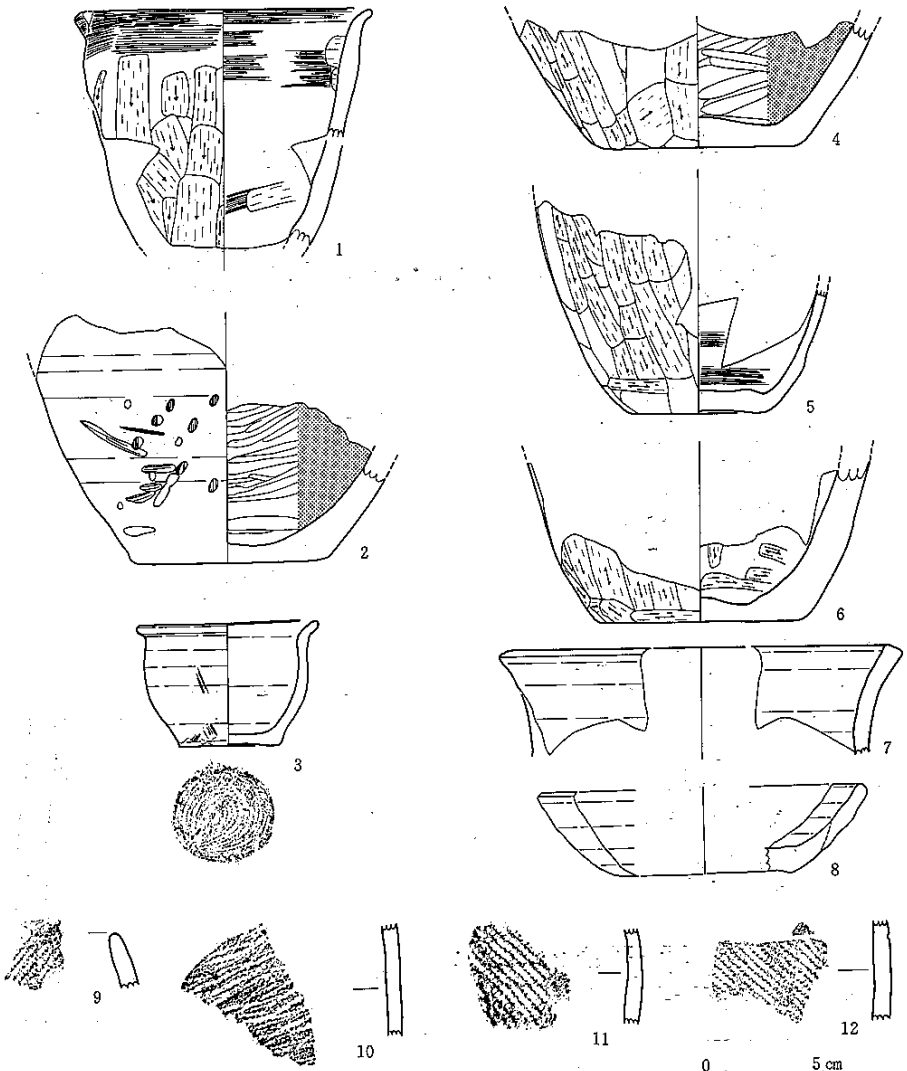
〔**堆積土**〕堆積土は削平のため2層だけが残っていた。第1層は褐色シルト層で壁際を除き、住居全体に堆積し、層中に焼土。木炭、地山粒を含む。第2層は黄褐色シルト層で壁際に



土師器観察表

図版	出土層位	種別	内面	外面	底部切離し	器高	口径	体径	底径	分類番号	登録番号
1	2住ー床直	土師器（坏）	ミガキ黒	ロクロ	手持ちケズリ	3.9	13.4		7.4	B－I	15
2	2住ーD－床直	土師器（坏）	ミガキ黒	ナデ・ロクロ・ヘラケズリ	回転糸切り・ヘラケズリ	4.2	13.9		6.7	B－II	8
3	2住ー埋10	土師器（坏）	ミガキ黒	ロクロ・ヘラケズリ	回転糸切り・ケズリ	5.0	13.7		6.9	B－II	9
4	2住ー床直	土師器（坏）	ミガキ黒	ロクロ	ロクロ	4.0	14.5		6.9	B－III	11
5	2住ーX	土師器（坏）	ミガキ黒	ヨコナデ	回転糸切り・手持ケズリ	4.4	13.7		7.0	B－II	10
6	2住ー埋1	土師器（坏）	ミガキ黒	ロクロ	回転糸切り	3.8	13.3		6.6	B－III	7
7	2住カマド・煙道	土師器（甕）	ロクロ	ロクロ	不明	18.6				B－I	30

第13図　第2住居跡出土遺物〔I〕



土師器観察表

図版	出土層位	種別	内面	外面	底部切離し	器高	口径	体径	底径	分類番号	登録番号
1	2住－DK	土師器（甕）	ヨコナデ・ナデケズリ	ヨコナデ・ケズリ	不明		12.6			A－II	27
2	2住－廊道	〃	ミガキ黒	ロクロ・ケズリ	ケズリ				8.2		29
3	2住－西廊道	〃	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	5.1	7.7		4.3	B－II	24
4	2住－カマド内	〃	ミガキ黒	ケズリ	ケズリ				8.4		26
5	2住－D－床直	〃	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ				5.8		23
6	2住－A－床	〃	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ				8.4		25
7	2住－第4層	須恵器（甕）	ロクロ	ロクロ	不明		17.2				43
8	2住－C－埋8	須恵器（坏）	ロクロ	ロクロ			1.4				42

弥生土器体部観察表

図版	区・層位	口縁形態	調整			色調		分類記号	登録番号
			口唇部	口縁部		内面	外面		
						内面	外面		
9	2住－2	外傾－平縁	ナデ	ナデ	縄文(LR)	明るい黄橙	にぶい橙	II I b	57

弥生土器口縁部観察表

図版	出土層位	調整		色調		分類記号	登録番号
		内面	外面	内面	外面		
10	2住－8	ナデ	付加縄文(LR)	暗い黄茶	茶灰	III J 1	1090
11	床	ナデ	縄文(LR)	黄味白	うす黄	III J 1	1081
12	床	ナデ	縄文(RL)	明るい茶色	茶灰	III J 1	1082

第14図　第2住居跡出土遺物〔II〕

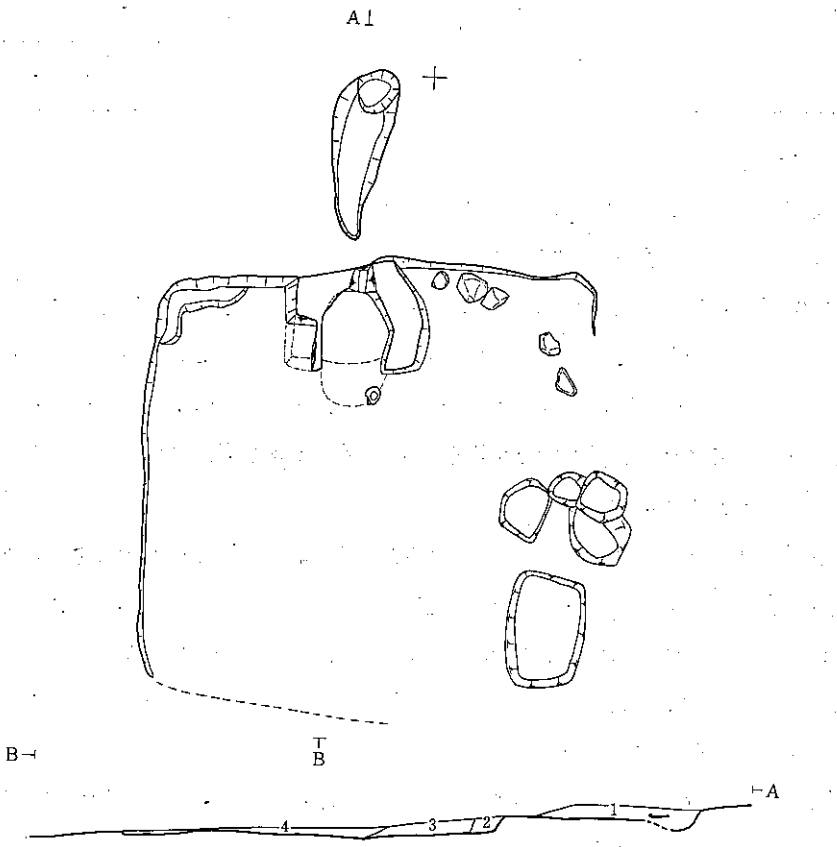
堆積している。

〔**床面**〕床面は礫を含んだ地山で凹凸がある。南に向って若干傾斜している。

〔**壁**〕東・北、ともに地山を掘りこんで壁としている。立ち上りはゆるやかである。壁高は西壁の部分で約 14 ㎝、北壁で 9〜10 ㎝である。

〔**柱穴**〕確認できなかった。

〔**カマド**〕全長 2.65m、最大幅 1.1m のカマドが北壁東寄りにつくりつけられている。構造的には、焚口部、燃焼部、煙道部、煙出し部からなる。削平のため燃焼部、煙道部の天井はない。焚口部、燃焼部は、粘土積みで構築されている。燃焼部からゆるやかな段を境にして、住居外に煙道部がのびている。燃焼部内の長さは 60 ㎝、幅は 55 ㎝である。煙道部は、燃焼部側が狭く、煙出し部の方向に徐々に広がっている。煙出し部の底面は、ほぼ水平で、煙道部の底面



第 3 住居跡堆積土観察表

層位	層 No.	土色	土性	備考
第1層	4	褐色(7.5YR4/3)	シルト	焼土・木炭・地山粒を含む
カマド	1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	下部で焼土を多く含む
	2	褐色(10YR4/6)	シルト	カマド奥壁構築土か？
	3	にぶい赤褐色(5YR4/4)	シルト	

第15図　第 3 住居跡

より 5 cmほどくぼんでいる。煙道部の長さは 140 cmである。煙出し部は円形で直径 35 cmである。使用痕跡をみると、燃焼部の底面は暗赤褐色に焼けている。

〔**その他の施設**〕北西隅に幅 12 cm、深さ 4 cmほどの溝があるが、位置と形態から周溝の残存とも考えられる。

〔**出土遺物**〕弥生土器片、土師器が出土している。数量および特徴については、第 3 表、第 16 図に示した。

第 4 表　第 3 住居跡出土破片集計表

	弥生式土器			土師器甕			土師器坏		
	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部
カマド				1	17				
カマド(煙道)				1	44				
カマド　埋1								1	
床					3				1
埋　3					1				
埋　1		3			40	1	1	1	
X				1	7	2	2		

第 4 住居跡

〔**確認面**〕第 1 住居跡の床面で確認された。

〔**重複**〕第 1 住居跡と重複しており、それより古い。

〔**平面形、方向**〕長軸 4.7m、短軸 4.6m の大きさで、ほぼ正方形である。

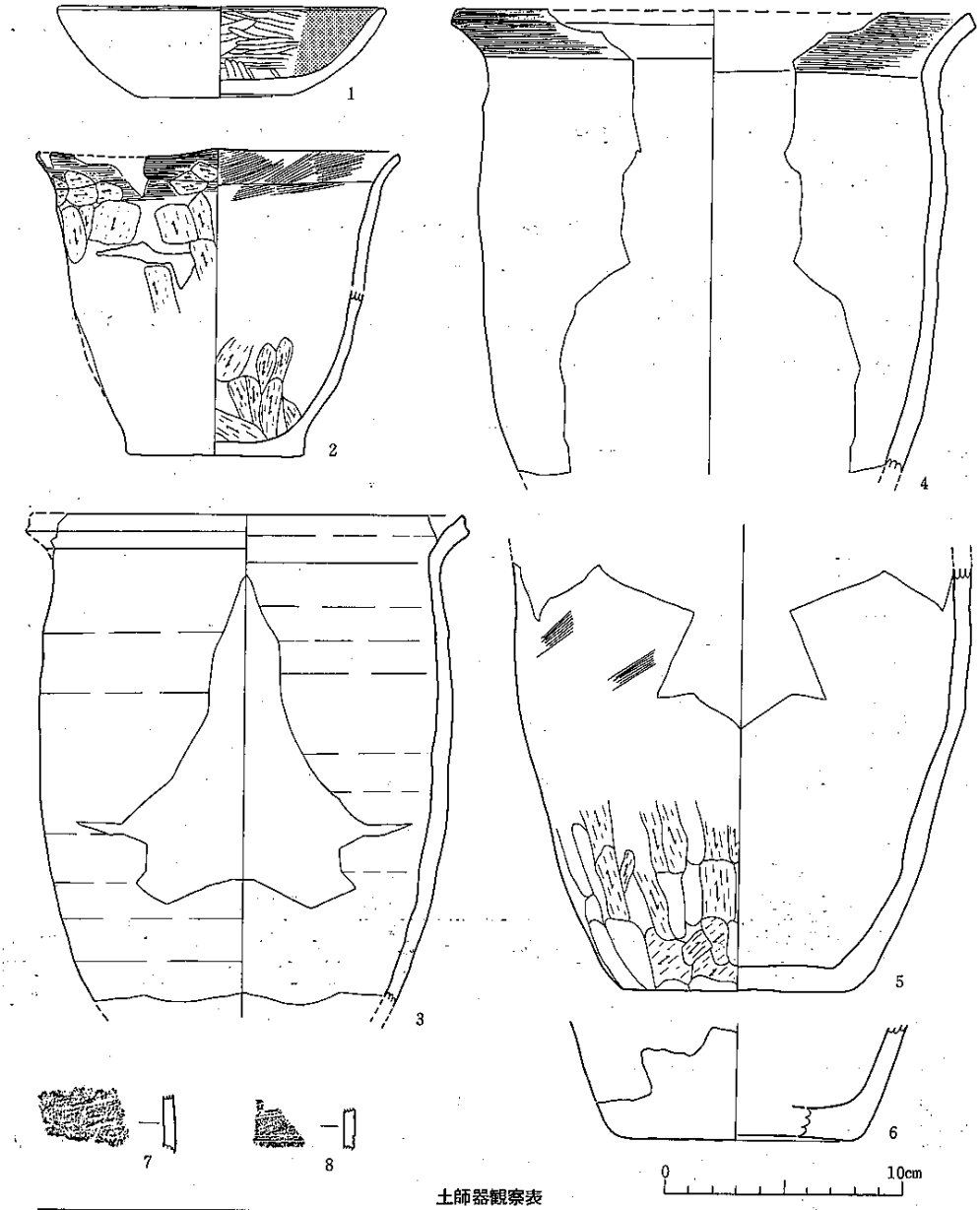
〔**堆積土**〕堆積土は 3 層に大別できる。第 1 層はにぶい黄褐色シルトで住居中央部に堆積しているが、第 1 住居跡の貼り床層である。したがって、この第 1 層は厳密な意味では第 4 住居跡の堆積土ではない。第 2 層は黒褐色シルト層で住居中央部に堆積する。第 3 層はにぶい黄褐色シルトで壁際に堆積している。

〔**壁**〕四辺ともに残っている。住居跡の北半は地山を掘り込んでおり、南半は第Ⅴ層を掘り込んで壁としている。南北の壁とも立ち上りは比較的ゆるやかである。東西壁の立ち上りは比較的急である。壁高は南・北で工 15～20 cm、東・西で 10～15 cmである。

〔**床面**〕床面は中央部がややくぼむ。北壁周辺は地山を掘り込んで床としており、他は貼床されている。貼床の部分は凹凸がある。

〔**柱穴**〕床面では、検出できなかったが、貼床を除去した面で 4 個のピットを確認した。4 個とも柱痕跡と掘り方が識別できた。

〔**カマド**〕全長 2m、最大幅 98 cmのカマドが北壁中央よりにつくりつけられている。構造は、焚口部、燃焼部、煙道部、煙出し部からなる。焚口部、燃焼部の側壁は平たい石を利用して構築されている。燃焼部の奥にある段を境にして住居跡外に掘り抜いた煙道部があり先端部に煙出しの穴がある。焚口部から燃焼部にかけての底面は浅い皿状となっている。燃焼部内の



土師器観察表

図版	遺構出土層位	種別	調整 内面	調整 外面	底部	器高	口径	底径	分類記号	登録番号
1	カマド付近床	土師器(坏)	ミガキ（黒）	ナデ	ケズリ	3.9	13.9	6.8	A	3
2	煙道	土師器(甕)	ナデ	ケズリ	ケズリ	12.9	15.2	7.4	A－2	31
3	煙道	土師器(甕)	ロクロ	ロクロ			18.6		B－1	32
4	煙道	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ			22.2		A－1	33
5	煙道	土師器(甕)	ナデ	ケズリ				9.5		34
6	1層	土師器(甕)	ヘラナデ	ケズリ		25.8	23.1	12.4		39

弥生土器体部観察表

図版	遺構出土層位	調整 内面	調整 外面	文様表現技法	色調 内面	色調 外面	分類記号	登録番号
7	1層	ナデ	付加縄文(LR)		にぶ橙	明茶	J	1094
8	1層	ナデ	ミガキ	横位沈線・弧状沈線	明茶灰	にぶ黄橙	IF2	1756

第16図　第3住居跡出土遺物

長さは 80 cm、幅は 50 cmである。煙道部は長さが 1m、幅が 30 cmである。焚口部から燃焼部の底面は熱のため赤褐色に硬化している。

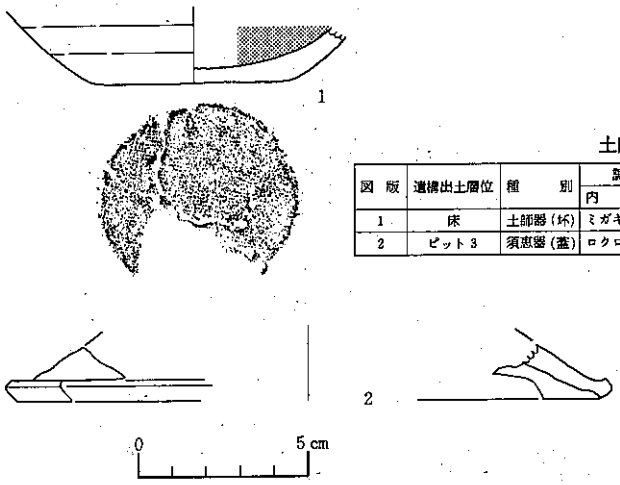
〔**周溝**〕カマド、ピットのところを除いて全周している。断面形は「U」字形で、幅 14 cm、深さ 5〜10 cmである。

〔**その他の施設**〕カマドの左右に 2 つのピットが検出された。ピット 1 は長軸 90 cm、短軸 68 cmである。ピット 2 は楕円形で長軸 90 cm、短軸 70 cmである。

〔**出土遺物**〕弥生土器片、土師器、須恵器片が出土している。各々の数量および特徴については、第 4 表、第 17 図に示した。

第 5 表　第 4 住居跡出土遺物破片集計表

出土地	弥生土器			土師器甕			土師器坏		
	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部
カマド		1			28		3		
カマド 埋2							1		
Pit 3 埋2				1	20	1			
Pit 3 埋1		1		7	5				
床					4				
第2					7	1	6	5	1
第1					8		2	7	
X					2				



土師器・須恵器観察表

図版	遺構出土層位	種別	調整 内面	調整 外面	口径	底径	分類記号	登録番号
1	床	土師器(坏)	ミガキ(黒色)	ロクロ・ケズリ		5.5	B 1	20
2	ピット3	須恵器(蓋)	ロクロ	ロクロ	16.1			44

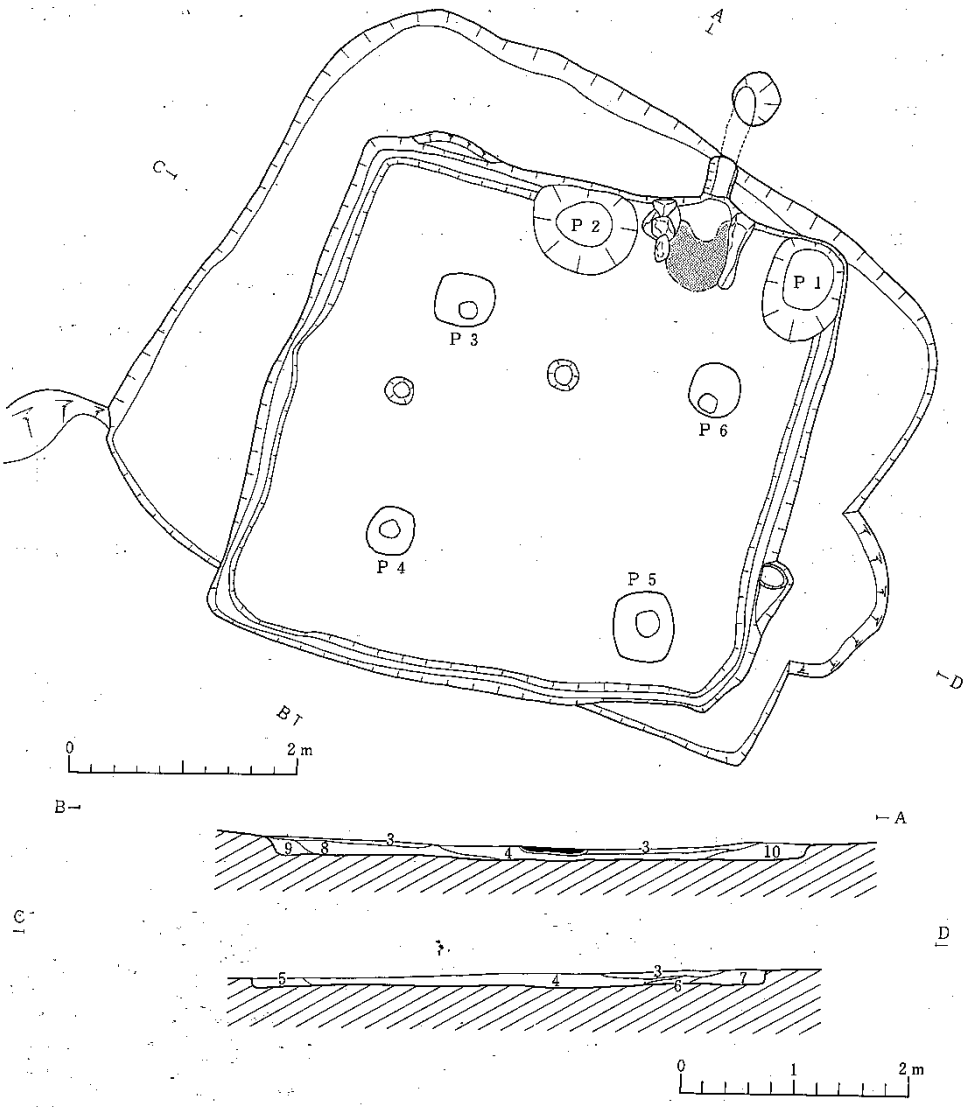
第17図　第 4 住居跡出土遺物

第 5 住居跡

〔**確認面**〕4 層上面で確認された。

〔**重複**〕第 10 土壙と重複している。土壙の堆積土を切って構築されている。

〔**平面形**〕住居の南半が削平されており、残存する東・西・北壁の状況から平面形は方形と推定される。



第4住居跡堆積土観察表

層位	層No	土色	土性	備考
	1	明赤褐色(2.5YR5/6)	シルト	焼け面・第1住の地床炉
第1層	2	暗赤褐色(5YR3/4)	シルト	
	3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	粘性あり、第1住の貼り床状
第2層	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
	5	褐色(10YR4/4)	シルト	
	6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	クレイ・シルトのブロック	
第3層	7	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土木炭粒僅かに含む
	8	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	
	9	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	
	10	暗褐色(10YR3/3)	シルト	褐色(10YR4/6)シルトのブロック僅かに含む

第18図 第4住居跡

〔**堆積土**〕堆積土は削平のため残っていたのは1層だけである。暗褐色のシルト層中に木炭を含む。

〔**壁**〕住居跡の北半が残っており、第Ⅳ層を掘り込んでいる。壁はゆるやかに立ち上る。北壁の高さは25～30㎝である。

〔**床面**〕第Ⅴ層を床としており比較的軟らかい。全体に南側に傾斜している。

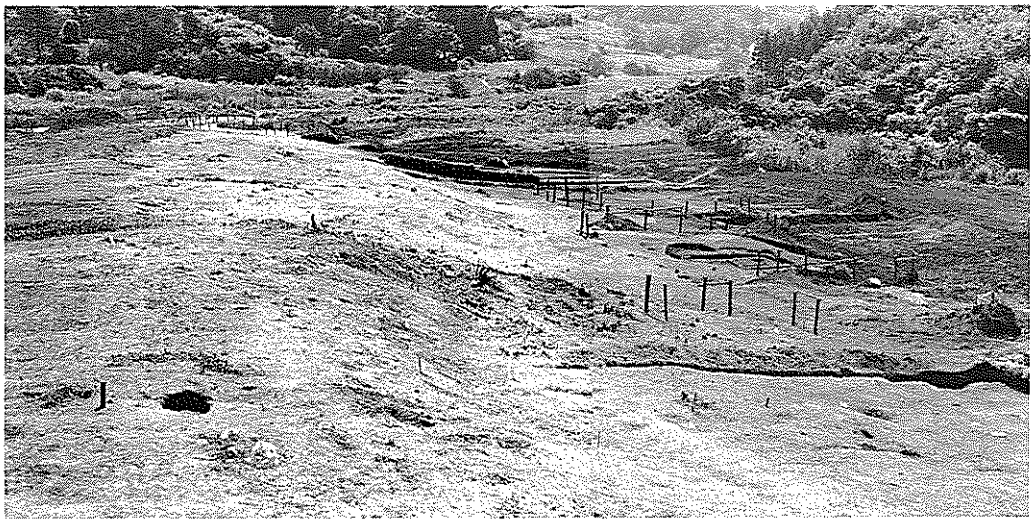
〔**カマド**〕全長1.8m、最大幅90㎝のカマドが北壁中央につくりつけられている。構造は、焚口部、燃焼部、煙道部、煙出し部からなる。燃焼部の側壁は礫を用いて構築されている。燃焼部の奥壁にある段を境にして住居外に煙道部を掘り抜いている。先端部に煙出しの穴がある。燃焼部内側は長さ60㎝、幅30㎝である。煙出しの穴は直径60㎝、深さ30㎝の円形である。燃焼部の底面は赤褐色で硬く焼けている。

〔**その他の施設**〕カマドの東側に楕円形で、長軸65㎝、短軸50㎝、深さ15㎝のピットがある。堆積上中に木炭を含む。

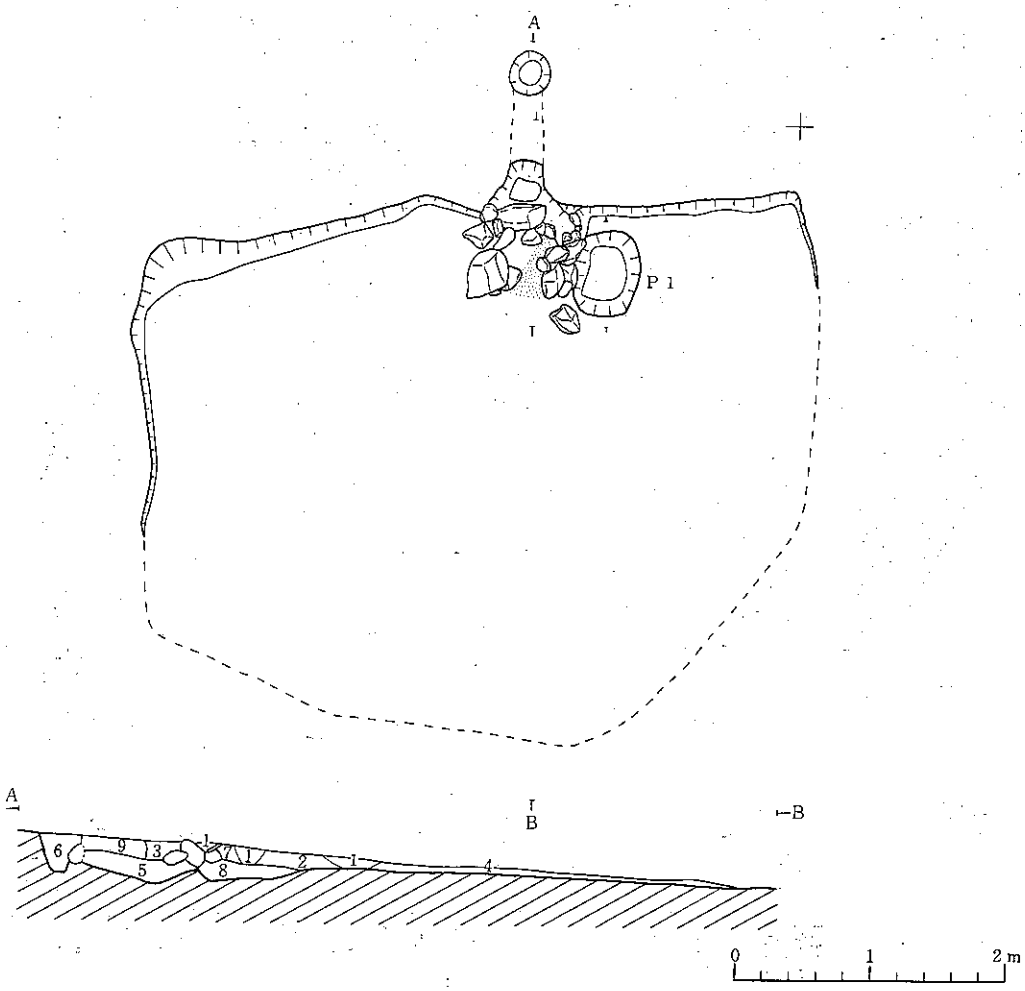
〔**出土遺物**〕弥生土器片、石器、土師器が出土している。各々の数量および特徴については、第6表、第20図に示した。

第6表　第5住居跡出土遺物破片集計表

	弥生式土器			土師器甕			土師器坏		
	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部
カマド								1	
カマド内				3	17				
床					3			1	
埋1	1	1			1			1	
X		1			4			6	



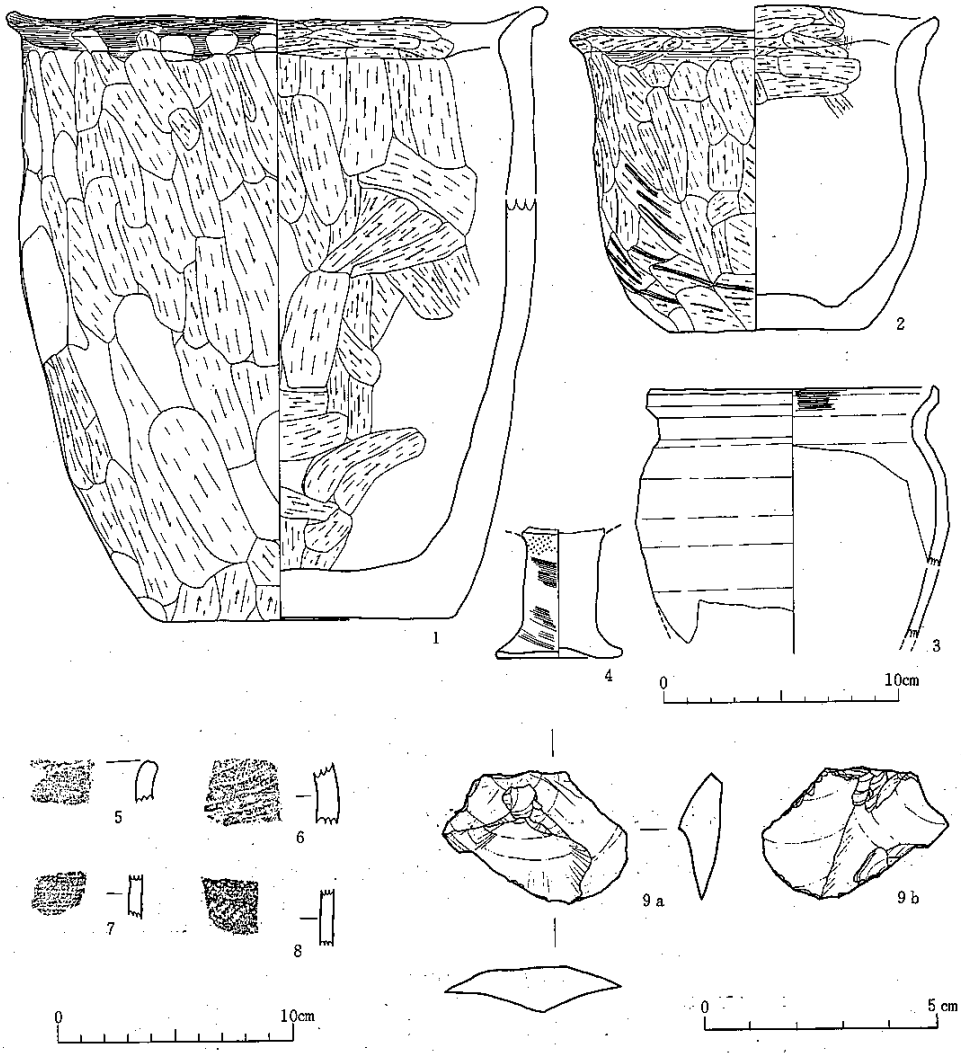
南緩斜面遠景



第5住居跡堆積土観察表

層位	層No.	土色	土性	備考
1	1	暗褐色10YR3/3	シルト	焼土粒若干含む。カマド内堆積土
2	2	褐色10YR4/4	シルト	カマド内堆積土
3	3	暗褐色7.5YR3/3	シルト	木炭・焼土を含む。カマド内堆積土
4	4	暗褐色10YR3/4	シルト	木炭を含む。住居内堆積土
5	5	褐色7.5YR4/4	シルト	焼土多量に含む
6	6	暗褐色10YR3/4	シルト	地山ブロックを含む
7	7	褐色7.5YR4/6	シルト	焼土多量に含む
8	8	暗褐色7.5YR3/4	シルト	木炭・焼土を含む。燃焼部堆積土
9	9	褐色7.5YR4/4	シルト	天井の残存部分。地山

第19図　第5住居跡



土師器観察表

図版	遺構出土層位	種別	調整 内面	調整 外面	器高	口径	底径	分類記号	登録番号
1	1 層	土師器(甕)	ロクロ	ナデ ロクロ		12.5		B II	36
2	カマド支脚	土師器(甕)	ヘラナデ	ナデ・ケズリ	13.9	15.8	8.2	A I	37
3	カマド東側ピット	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ				A I	38
4	床	土師器(高坏)		ナデ					

弥生土器口縁部観察表

図版	区・層位	口縁形態	調整 口唇部	調整 口縁部 内面	調整 口縁部 外面	色調 内面	色調 外面	分類記号	登録番号
5	5住A埋1	外傾	縄文	ナデ	ミガキ	にぶり橙	茶	II J a	95

弥生土器体部観察表

図版	地区・層位	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	分類記号	登録番号
6	5住一埋1	ナデ	付加縄文(LR)	明るい茶灰	明るい黄橙	III J I	1095
7	5住一埋1	ナデ	付加縄文(LR)	うす黄茶	にぶい橙	III J I	1096
8	5住一埋1	ナデ	縄文(RL)	灰味黄橙	赤味黄	III J I	1097

第20図　第5住居跡出土遺物

3. 土壙および住居跡以外の出土遺物

第１区

第Ⅱ層および第Ⅲ層から縄文土器、弥生土器、石器が出土している。

第２区

DB－225～DC－225 区の周辺に分布し古い沢を埋積している第５層から弥生土器、土師器、石器が出土している。

第３区

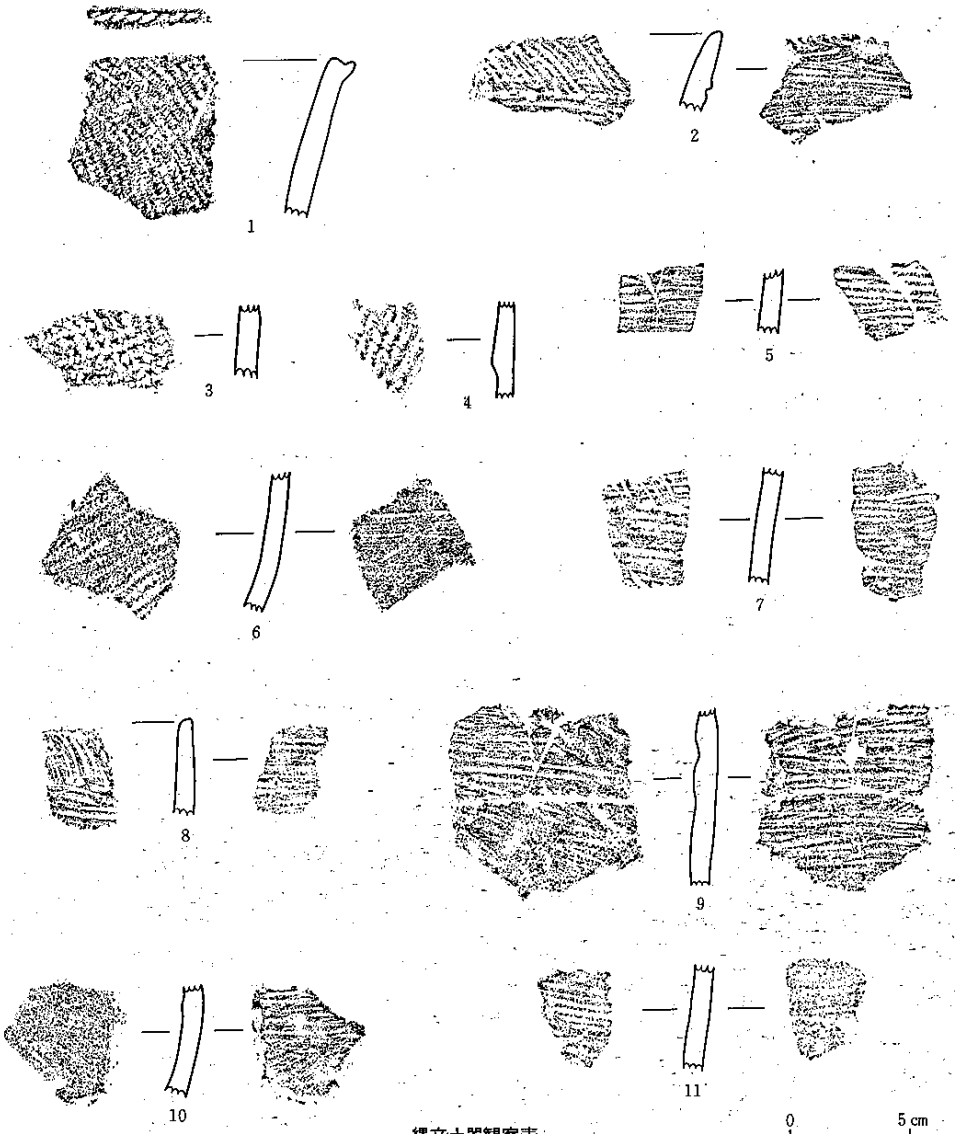
第Ⅱ層から弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

この他、第 1～3 区の表土からは、まとまりはみられないものの、弥生土器、土師器、須恵器、石器などが出土している。

図版では、第１区第Ⅱ層出土の弥生土器を主体とし、他の遺物については、特徴的なものだけをとりあげた。

西緩斜面遠景

縄文土器

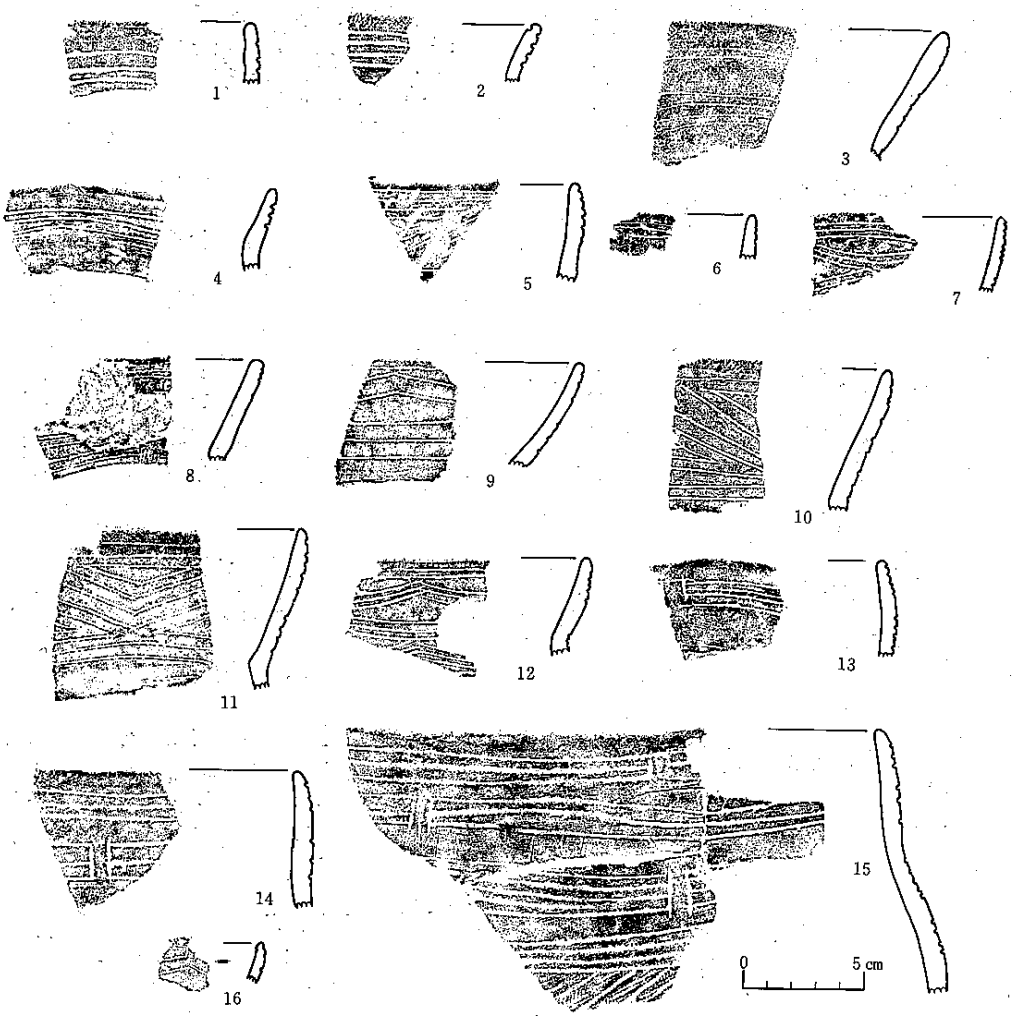


縄文土器観察表

図版	地区	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	口唇部	登録番号
1	AL−107	ナデ	縄文	赤黄	にぶい橙	縄文押圧	1022
2	AQ−141	条痕	条痕・刺突	うす橙	にぶい橙	ナデ	1031
3	AN−140	ナデ	縄文	明るい茶灰	うす茶		1030
4	AN−140	ナデ	縄文	明るい黄橙	にぶい橙		1028
5	AQ−140	ナデ	条痕	黄味白	にぶい橙		1037
6	AM−117	条痕	縄文	黄茶	にぶい橙		1024
7	AP−140	条痕	条痕	明るい茶	にぶい橙		1029
8	AS−137	条痕	条痕・刺突	茶	暗い黄茶	ナデ	1035
9	AS−137	条痕	条痕	茶	暗い黄茶		1034
10	AS−135	マメツ(条痕)	条痕	暗い黄茶	明るい茶		1033

第21図　第II層出土縄文土器

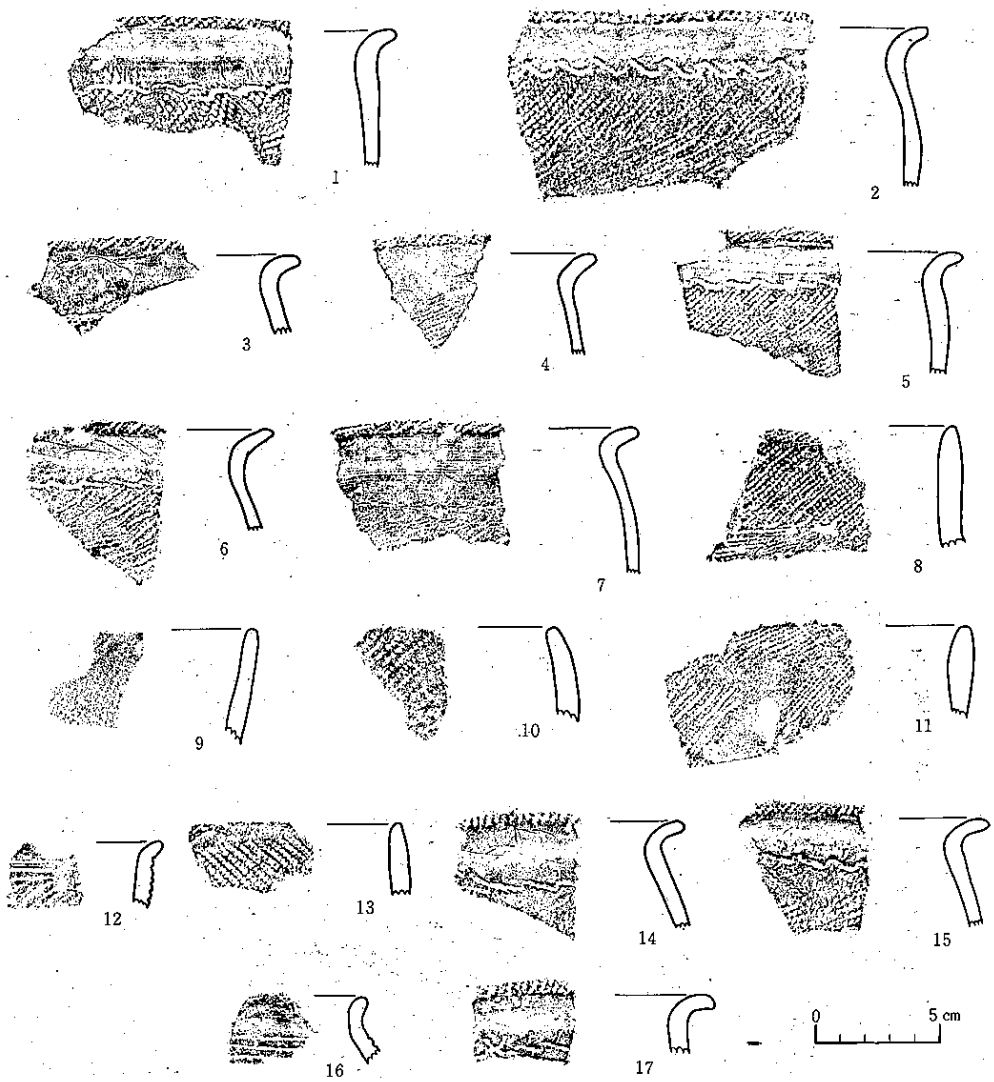
弥生土器



弥生土器口縁部観察表

図版	地区	口縁部形態	調整 口唇部	調整 口縁部 内面	調整 口縁部 外面	文様表現技法	色調 内面	色調 外面	分類記号	登録番号
1	AL－114	直立	ナデ	ナデ・ミガキ	ミガキ	横位沈線	明るい茶灰	黄味白	IAb	66
2	AT－141	外傾	縄文	ナデ・ミガキ	ミガキ	横位沈線	茶灰	茶灰	IAa	74
3	AF－96	外傾	ナデ	ナデ	ミガキ	弧状沈線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	IBb	15
4	AI－163	外傾	ナデ	ナデ・ミガキ	ミガキ	横位沈線	にぶい橙	にぶい橙	IAb	50
5	AJ－108	内弯	ナデ	ナデ	ミガキ	横位沈線・斜位沈線	明るい茶灰	黄味白	IEb	19
6	AL－117	直立	縄文(LR)	ナデ	ミガキ	横位沈線・斜位沈線	明るい茶灰	明るい黄橙	IEa	41
7	AK－161～163	外傾	ナデ	ナデ	ミガキ	横位沈線・弧状沈線・斜位沈線	にぶい橙	明るい黄橙	ICb	40
8	AM－110	外傾	ナデ	ナデ・ミガキ	ミガキ	横位沈線・縦位沈線・斜位沈線	明るい茶灰	茶灰	IHb	61
9	AT－140	外傾	ナデ	ナデ	ミガキ	横位沈線・弧状沈線	明るい茶灰	暗い黄茶	IFb	73
10	AM－160～164	直立	ナデ	ナデ・ミガキ	ミガキ	横位沈線	明るい茶灰	うす黄	IAb	71
11	AT－114	外傾	ナデ	ナデ	ミガキ	横位沈線・斜位沈線	明るい茶灰	灰味黄茶	IEb,	67
12	AL－116	外傾	ナデ	ナデ・ミガキ	ミガキ	横位沈線・縦位沈線	茶灰	明るい黄橙	IDb	69
13	AG－162	内弯	ナデ	ナデ	ミガキ	横位沈線・弧状沈線	黄茶	黄茶	IFb	49
14	AT－140	内弯	ナデ	ナデ	ミガキ	横位沈線・縦位沈線	灰味黄橙	明るい茶灰	IDb	37
15	AT－140	内弯	ナデ	ナデ	ミガキ	横位沈線・縦位沈線	灰味黄橙	明るい茶灰	IDb	36
16	AS－140	外傾	ナデ	ナデ・ミガキ	ミガキ	横位沈線・縦位沈線・斜位沈線	明るい茶	明るい茶	IGb	46

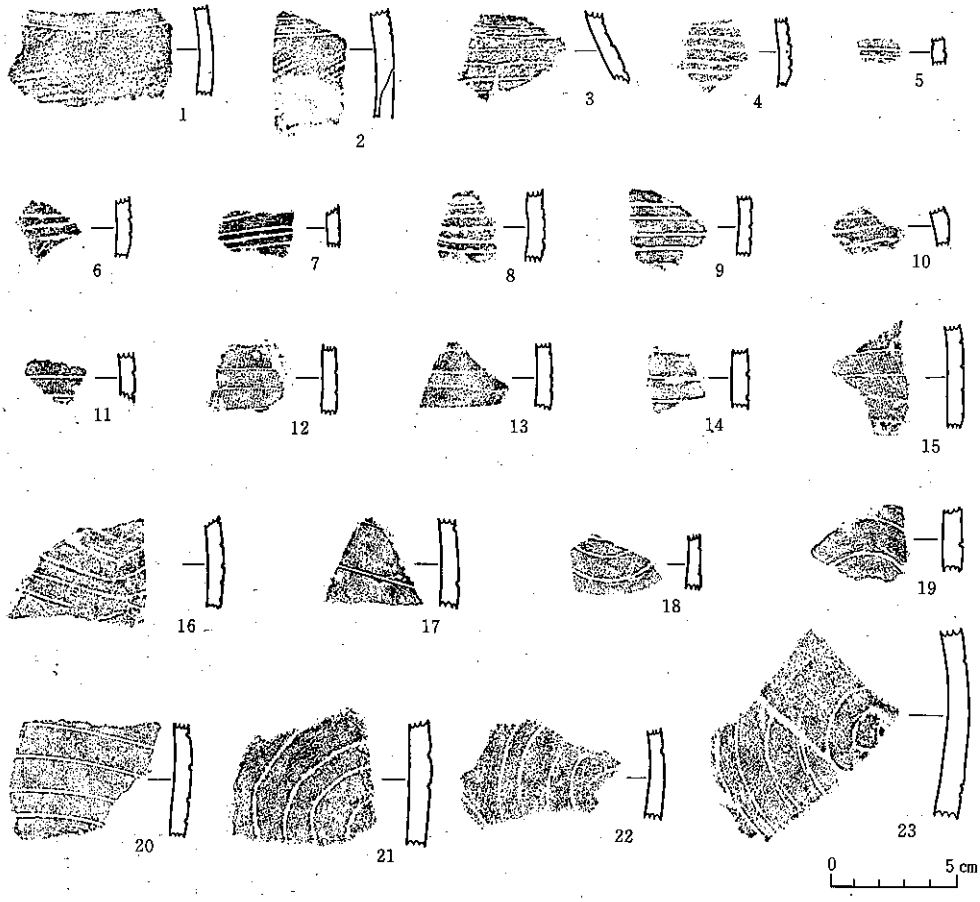
第22図　第II層出土弥生土器口縁部（第I群）



弥生土器観察表

図版	地区	口縁部形態	調整 口唇部	調整 口縁部 内面	調整 口縁部 外面	色調 内面	色調 外面	分類記号	登録番号
1	AI−96	外反	縄文(LR)	ミガキ	ナデ	暗い黄茶	灰味黄茶	IIJa	4
2	AF−95	外反	ナデ	ナデ	ナデ	うす橙	にぶい橙	IIJb	3
3	AS−135	外反	付加縄文(LR)	ナデ	ナデ	黄茶	うす黄	IIJa	8
4	AE−60	外反	縄文	ナデ	ナデ	暗い黄茶	茶灰	IIJa	1
5	AE〜AN−92	外反	縄文(LR)	ミガキ	ナデ	灰味黄茶	黄茶	IIJa	2
6	AM−110	外反	縄文(LR)	ナデ	ナデ	暗い黄茶	暗い黄茶	IIJa	6
7	AI−99	外反	縄文(LR)	ナデ	ナデ	にぶい橙	明るい茶灰	IIJa	5
8	AL−113	直立	縄文(LR)	ミガキ	縄文(LR)	茶	茶	IIIa	21
9	AL−107	直立	ナデ	不明	縄文(LR)	明るい茶灰	明るい黄橙	IIIb	18
10	AS−129	内弯	縄文文	不明	縄文(LR)	黄茶	茶灰	IIIa	26
11	AL−115	直立	ナデ	ミガキ	縄文(LR)	明るい茶	にぶい橙	IIIb	22
12	AT−109	外傾	ナデ	ナデ	ナデ	灰味黄茶	にぶい橙	IIJb	20
13	AK−161−163	直立	ナデ	ナデ	縄文(RL)	にぶい橙	にぶい橙	IIIb	27
14	AL−160	外反	縄文(LR)	ナデ・ミガキ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	IIJa	9
15	AI〜AK−160〜164	外反	縄文(LR)	ナデ・ミガキ	ナデ	にぶい橙	黄茶	IIJa	10
16	AS−140	外傾	ナデ	ナデ	ナデ	茶灰	暗い黄茶	IIJb	38
17	AI〜AK−160〜164	外反	縄文(LR)	ナデ・ミガキ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	IIJa	11

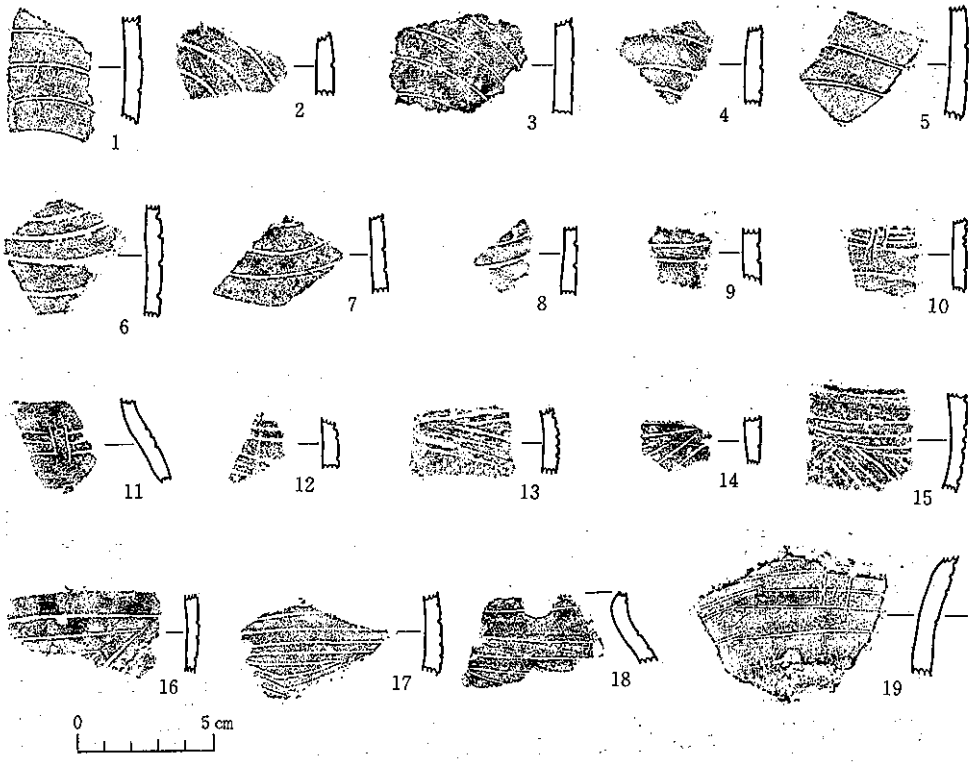
第23図　第II層出土弥生土器口縁部（第II群）



弥生土器体部観察表

図版	地区	調整 内面	調整 外面	文様表現技法	色調 内面	色調 外面	分類記号	登録番号
1	AI−79	ナデ	縄文(LR)・ミガキ	横位沈線	うす黄茶	にぶい橙	IA1	78
2	AK−111	ミガキ	縄文(LR)・ミガキ	横位沈線	灰味黄茶	明るい茶	IA1	113
3	AJ−99	ミガキ	ミガキ	横位沈線	明るい茶灰	灰味黄茶	IA2	96
4	AK−115	不明	ミガキ	横位沈線	黄味白	明るい茶灰	IA2	150
5	AJ−99	不明	ミガキ	横位沈線・斜位沈線	暗い茶	にぶい橙	IE2	97
6	AJ−114	ナデ	ミガキ	横位沈線	明るい茶灰	明るい黄橙	IA1	133
7	AJ−114	ミガキ	ミガキ	横位沈線・斜位沈線	茶灰	にぶい黄橙	IE2	135
8	AJ−140	ミガキ	ミガキ	横位沈線・弧状沈線	灰味黄茶	明るい茶灰	IF2	199
9	AI−115	ナデ	ミガキ	横位沈線	にぶい橙	暗い黄茶	IA2	144
10	AI−107	ナデ	ミガキ	横位沈線	暗い茶	にぶい茶	IA2	104
11	AT−141	ナデ	ミガキ	斜位沈線	明るい黄橙	にぶい橙	IB2	207
12	AT−141	ナデ	ミガキ	横位沈線	黄味白	にぶい橙	IA2	209
13	AO−140	不明	ミガキ	横位沈線	明るい茶灰	暗い黄茶	IA2	200
14	AK−162	不明	ミガキ	横位沈線	緑味灰	にぶい黄橙	IA2	252
15	AJ−154	不明	ミガキ	横位沈線・弧状沈線	にぶい橙	にぶい橙	IF2	226
16	AL−106	ナデ	ミガキ	斜位沈線	明るい茶灰	明るい黄橙	IB2	118
17	AK−161	ミガキ	ミガキ	斜位沈線	灰味茶	明るい茶灰	IB2	217
18	AG−99	ナデ	ミガキ	弧状沈線	黄茶	黄味白	IC2	91
19	AN−135	不明	ミガキ	弧状沈線	うす黄茶	赤味黄	IC2	185
20	AM−113	ナデ	ミガキ	弧状沈線	灰味黄茶	暗い黄茶	IC2	128
21	AK−110	不明	ミガキ	弧状沈線	明るい茶灰	灰味黄茶	IC2	110
22	AK−112	ナデ	ミガキ	弧状沈線	暗い黄茶	明るい黄橙	IC2	114
23	AP−129	ナデ	ミガキ	弧状沈線	黄茶	明るい黄橙	IC2	179

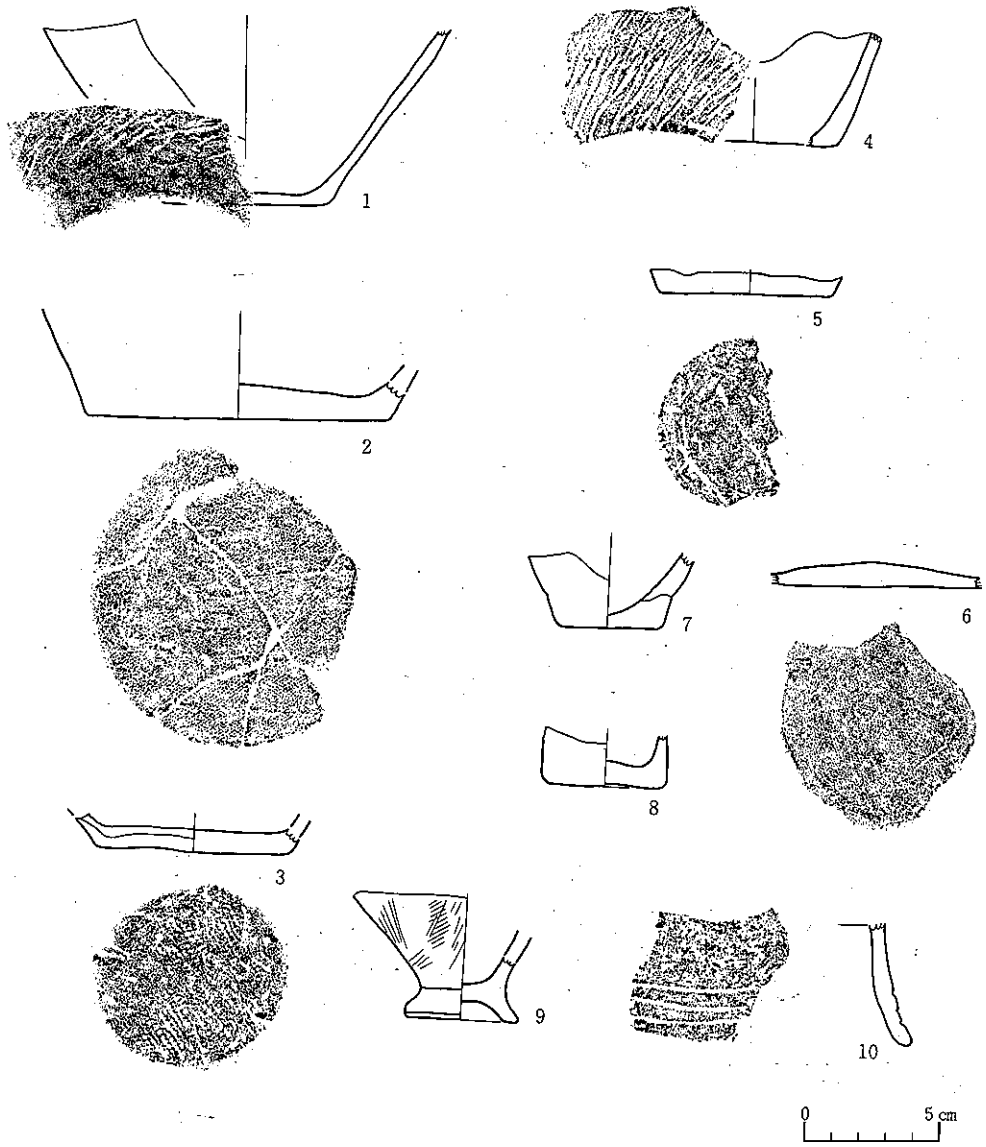
第24図　第II層出土弥生土器体部（A～C類）



弥生土器体部観察表

図版	地区	調整 内面	調整 外面	文様表現技法	色調 内面	色調 外面	分類記号	登録番号
1	AJ－152	ナデ	ミガキ	弧状沈線	灰味茶	明るい茶灰	IC2	214
2	AL－113	ナデ	ミガキ	弧状沈線	暗い黄茶	黄味白	IC2	123
3	AT－142	ミガキ	ミガキ	弧状沈線	黄味白	黄茶	IC2	212
4	AT－141	不明	ミガキ	弧状沈線	にぶい橙	明るい茶灰	IC2	210
5	AG－162	ナデ	ミガキ	弧状沈線	灰味黄茶	黄味白	IC2	250
6	AT－141	不明	ミガキ	弧状沈線	暗い黄茶	明るい灰茶	IC2	211
7	AN－92	ナデ	ミガキ	弧状沈線	うす黄	黄茶	IC2	94
8	AM－162	ナデ	ミガキ	弧状沈線	うす茶	明るい茶灰	IC2	229
9	AT－140	ナデ	ミガキ	弧状沈線	黄味白	黄味白	IC2	206
10	AN－113	ナデ	ミガキ	弧状沈線・縦位沈線	明るい茶灰	黄味白	IG2	127
11	AI－99	ナデ	ミガキ	横位沈線・縦位沈線	明るい茶灰	黄味白	ID2	85
12	AI－99	不明	ミガキ	横位沈線・弧状沈線	にぶい橙	明るい黄橙	IF2	87
13	AI－115	ナデ	縄文(LR)・ミガキ	横位沈線・斜位沈線	灰味黄茶	暗い黄茶	IE1	145
14	AN－135	不明	ミガキ	横位沈線・斜位沈線	にぶい黄茶	明るい茶灰	IE2	184
15	AF－95	ナデ	ミガキ	横位沈線・斜位沈線	黄味白	暗い黄茶	IE2	76
16	AI－99	不明	ミガキ	横位沈線・斜位沈線	黄味白	灰味黄茶	IE2	89
17	AM－115	ミガキ	ミガキ	横位沈線・斜位沈線	暗い黄茶	明るい茶灰	IE2	152
18	AN－120	ナデ	ミガキ	横位沈線・弧状沈線	黄味白	黄味白	IF2	172
19	AJ－162	ナデ	ミガキ	斜位沈線・縦位沈線	緑味灰	明るい茶灰	IH2	218

第25図　第II層出土弥生土器体部（C～G類）

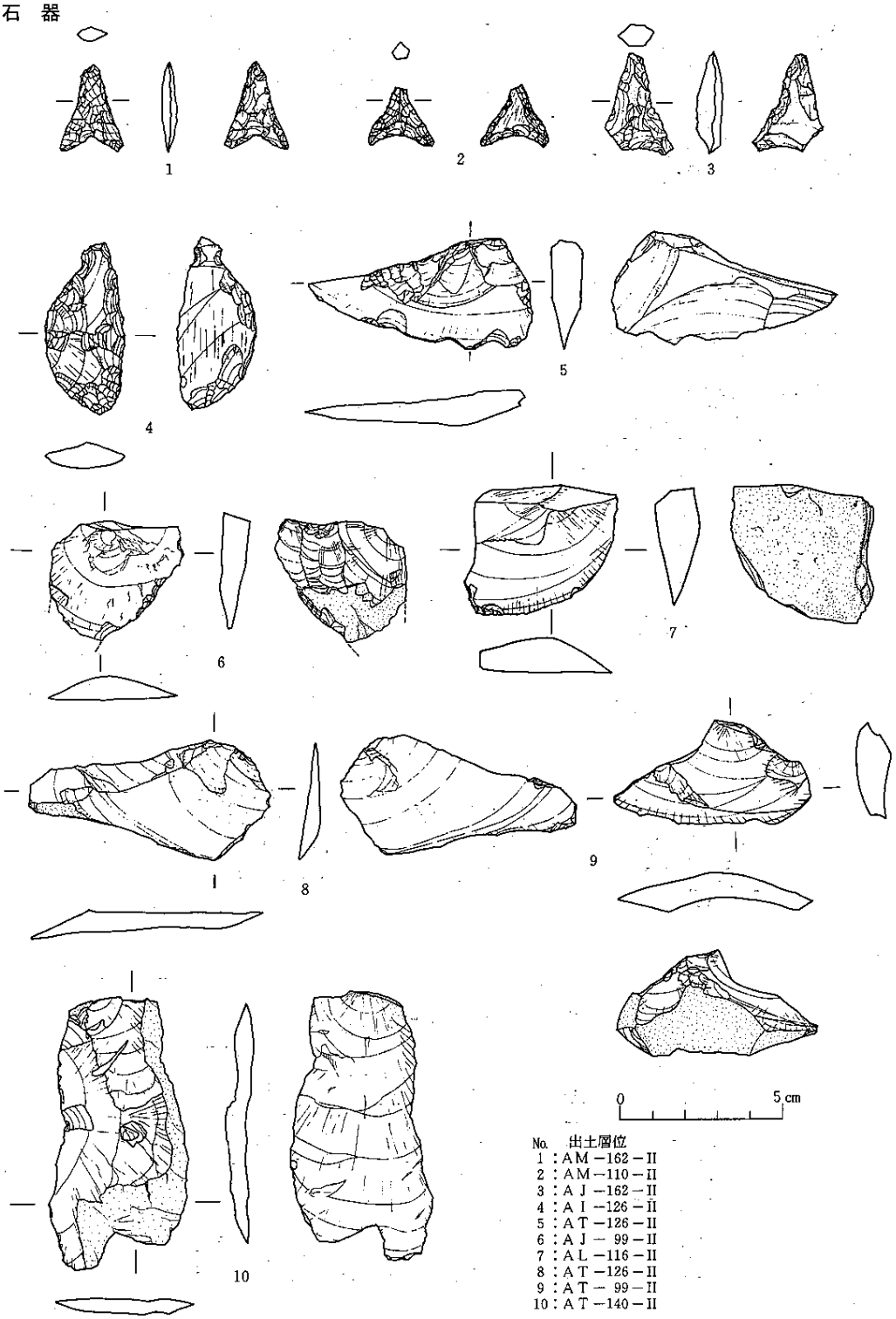


弥生土器底部観察表

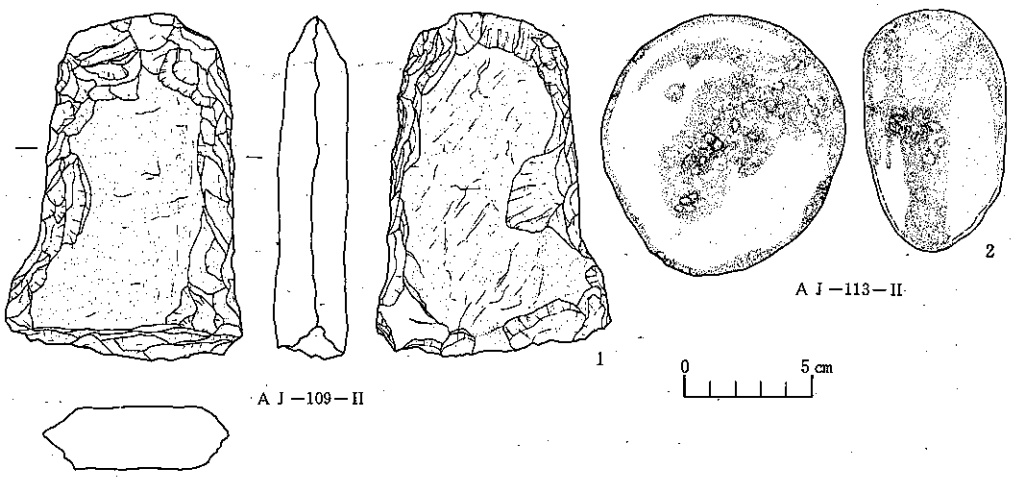
図版番号	地区層位	底部形態	底部調整		登録番号
			内面	外面	
1	AJ－109	平底	ナデ	ケズリ	1750
2	AI－140	平底	ナデ	網代	1741
3	AS－140	平底	ナデ	網代	1749
4	AA－114～116	平底	不明	ケズリ	1740
5	AK－162	平底	ナデ	ケズリ	1755
6	AL－113	平底	不明	網代	1746
7	AK－162	平底	ナデ	ケズリ	1754
8	AN－134	やや上げ底	ナデ	ケズリ	1748
9	AL－113	台付	ナデ	ケズリ	1745
10	AH－107	脚	ナデ		263

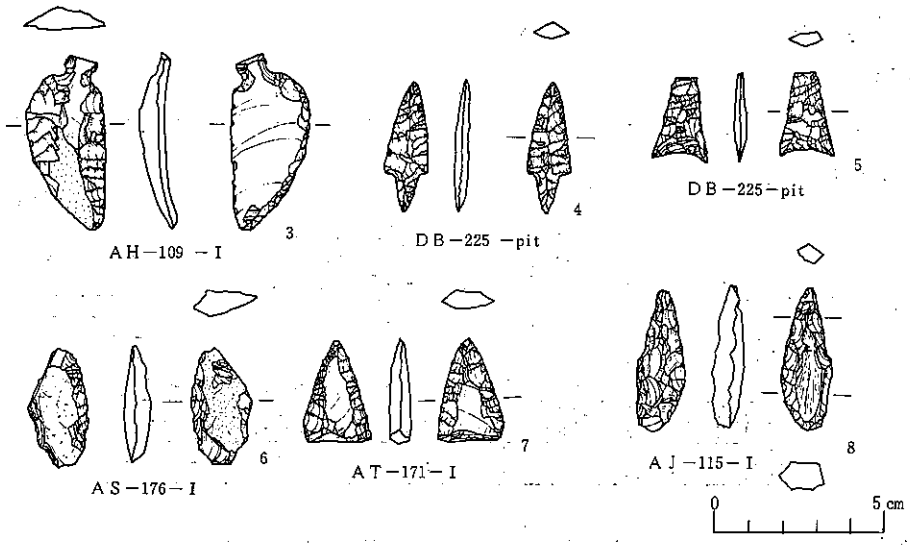
第26図　第II層出土底部

石　器

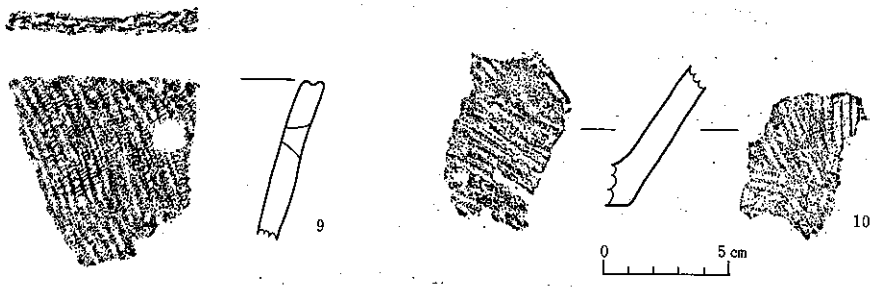


第27図　第II層出土剥片石器





縄文土器



縄文土器観察表

図版	地区・層位	部位形態	調整		色調		口唇部	登録番号
			内面	外面	内面	外面		
9	AM－105－I	外傾・平縁	ナデ	縄文	にぶい橙	にぶい橙	刺突	1003
10	AS－176－I	平底	条痕	条痕	暗い黄茶	にぶい橙		1015

第28図　礫石器と第Ⅰ層出土遺物

V. 考察

1. 第Ⅱ層の性格

ここでは調査の成果をふまえて、弥生土器を含む第Ⅱ層の性格について述べてみたい。第Ⅱ層は調査区の J—100 区を中心とする西緩斜面と I — 160 区を中心とする東緩斜面に分布する。前者についてはその分布面積は約 500 ㎡で北から南へ傾斜している。後者は分布面積が約 100 ㎡で西から東に傾斜している。両者は遺物が層離面に対し不規則な状態で出土していることから二次堆積の可能性が強いと考える。前者と後者は連続した層ではないが、両者とも黒色のシルト層であることや、出土遺物の主体が一本工具による沈線をもつ弥生土器であるなどの共通点が認められることから両者は同一の層と考えられる。

1. 遺構

(1) 土壙

土壙は計 10 基検出されている。これらの形態、規模、使用痕跡についての観察結果を示すと次のようになる。

第7表 土壙の観察表

	平面形	大きさcm	深さcm	使用痕跡
1	楕円形	53 × 53	8	堆積土上面が焼けている
2	楕円形	93 × 80	18	壁面がわずかに焼けている
3	楕円形	(50 × 38)	16	壁の上部が焼けている
4	長方形	108 × 95	26	側壁・底面が焼けている
5	長方形	108 × 78	30	側壁・底面が焼けている
6	長方形	145 × 52	40	側の下半・底面が焼けている
7	円形	173 × 176	54	側の下半・底面が焼けている
8	円形	100	27	焼けた痕跡がみられない
9	円形	110	30	〃
10	楕円形	110	30	〃

これらを遺構の使用痕跡から類型化すると次のように分類される。

1. 堆積土上面から底面にかけて焼けているもの
2. 側壁が焼けているもの
3. 側壁と底面が焼けているもの
4. 焼けた痕跡がみられないもの

各々は平面形からさらに第 8 表のようになる。

第 8 表 土壙の使用痕跡による分類

	使用痕跡	土壙 No.
1	堆積土上面に焼け面が認められるもの	1
2	側壁が焼けているもの	2. 3
3	底面、側壁が焼けているもの	4. 5. 6
4	焼けた痕跡が認められないもの	7. 8. 9. 10

(2)竪穴住居跡

今回の調査で5軒の住居跡発見された。これらの住居跡の平面形、規模、床面、柱穴、周溝、カマドなどについてふれてみたい。

〔**平面形**〕各々の住居跡についてその平面形を見ると、5 軒とも方形を基調としており、正方形のものと、長方形のものが認められる。ほぼ正方形のものは2軒、長方形のものは2軒不明のものは1軒である。3タイプとも四隅が丸味をおびている。

1. 正方形　第3住、第4住
2. 長方形　第1住、第2住
3. 不　明　第5住

〔**規模**〕平面形のほぼわかる第1住、第2住、第3住、第4住についてその規模を見るとつぎのようになる。

第1住と第2住は、規模が6×5m前後であること、面積が32㎡前後であることで類似性がみられる。

①｛第1住　6.1m×5.3m　32.33㎡
　第2住　6.1m×5.2m　31.72㎡｝
②　第3住　3.6m×3.5m　12,60㎡
③　第4住　4.7m×4.6m　21.62㎡

〔**床面**〕床面の構築方法を検討すると①粘土を貼って固め貼床にしているもの②地山そのものを床面としているものとに分れる。なお、貼床がみられるものについてはそれが住居跡全体に及ぶものではなく、部分的に認められるものである。

① 貼床の認められる住居跡、第1住、第2住、第4住
② 貼床の認められない住居跡、第3住、第5住

〔**周溝、柱穴**〕

周溝が確認されたものは第4住居跡だけである。第3住跡の北東隈に溝が確認されたが周溝か否かは不明である。

柱穴については確認されたものは第4住居跡のみである。

〔**カマド**〕

第1住のカマドだけが南壁に位置しており、他はすべて北壁である。北壁に位置しているカマドでは、煙道が残っていた。カマドは、いずれも壁につくりつけられたものである。主体部の構築状況を観察すると次のようになる。

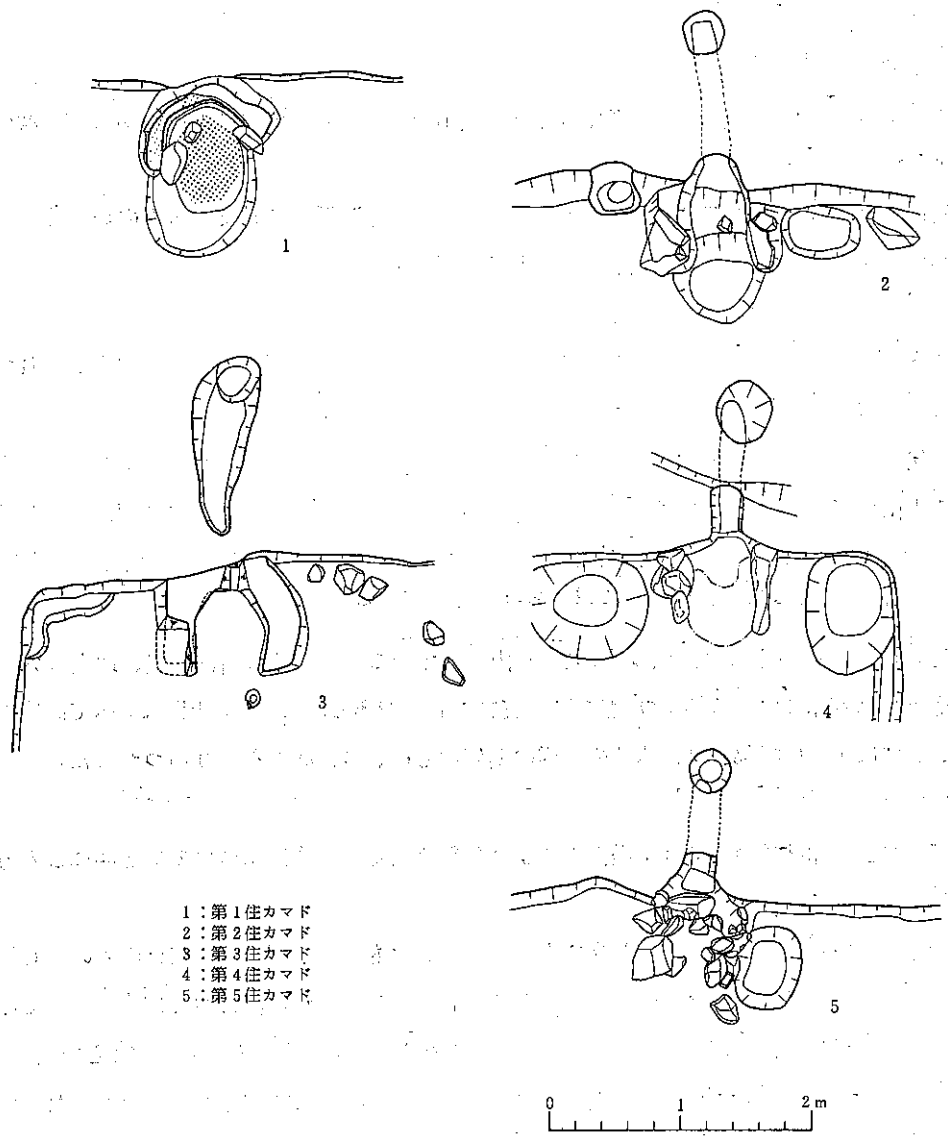
1．粘土の積み上げにより構築されたもの
2．粘土の積み上げと石組とを併用して構築されたもの

3．石組みにより構築されたもの

このことからその構築方法を考えるとつぎの３つのタイプに分類される。

第９表　各住居跡カマド構築方法

タイプ	カマドの構築方法	住居跡No.
1	主体部が粘土の積み上げにより構築	1．3
2	主体部が粘土の積み上げと石組とにより構築	2
3	主体部が石組により構築	4．5



第29図　各住居跡のカマド

〔**住居跡の分類**〕各住居跡について、平面形、規模、床面、柱穴、周溝、カマドなどについてそれぞれふれた。次に平面形、カマドをもとにして住居跡を分類してみた結果第 10 表のようになった。

第10表 住居跡の分類

平面形	カマド	周溝	柱穴	住居跡
正方形	石組	有	有	4
	粘土	不明	不明	1．3
長方形	粘土＋石組	不明	不明	2
不明	石組	不明	不明	5

2．遺物

(1)縄文土器

縄文土器は、第 1 区の第Ⅰ層～第Ⅱ層で計 37 点出土している。すべて破片であるが、次のような特徴が観察できた。

〔**器形**〕口縁部はすべて平縁で直立するもの。(2)口縁端近くで外反するものがある。形態が判明するものは、底部の 1 点のみである(第 21 図)。

〔**胎土**〕多くは植物の繊維を含むものである。

〔**文様**〕外面には、縄文、条痕文が施文されているもの、内面に、条痕文が施文されているもの、口唇部に繊糸圧痕文や刺突文が見られるものなどがある。

〔**年代**〕このような「縄文－条痕」、「条痕－条痕」を施文した特徴をもつ土器群は、小牛田町の素山貝塚(小牛田町:1970)山前遺跡(小牛田町教委:1976)などに類例がみられ、「素山Ⅱ式」とされている。したがってこれらは早期末の「素山Ⅱ式」に位置づけることができる。

(2)弥生土器

弥生土器は、第 1 区、第 2 区、第 3 区から出土している。口縁部資料は 75 点、地文以外の文様が認められる体部破片資料は 689 点、底部資料は 17 点である。これらの土器はすべて破片である。ここでは 1．口縁部、2．体部の文様の明確なもの、3．底部をとりあつかった。

＜分類＞

口縁部および体部については文様表現により分類を行ない、底部については形態による分類を行なった。

その結果、口縁部は、沈線により文様表現がなされたもの(Ⅰ類)、地文だけのもの(Ⅱ類)に大別された。Ⅰ類は文様表現の種類より A～H まで細分された。A および D については口唇部に縄文を施したものがある(ⅠAa、ⅠDa)、Ⅱ類は地文に縄文をもつもの(Ⅰ)と無文で「ミガキ」が施されているもの(J)に細分された。ともに口唇部に縄文をもつものともたないものがある。

体部は沈線により文様表現がなされたもの(Ⅰ類)、無文で器面に刺突文をもつもの(Ⅱ類)、

第11表　弥生土器各部位ごとの分類

口　縁　部

分類		口縁部文様表現の種類	地文 口縁部	地文 口唇部
I 沈線により文様構成をするもの	A	横位　沈線	無文(ミガキ)	a．縄文 b．無文(ミガキ)
	B	斜位　沈線	〃	無文
	C	弧状　沈線	〃	〃
	D	横位＋縦位　沈線	〃	a．縄文 b．無文(ミガキ)
	E	横位＋斜位　沈線	〃	無文
	F	横位＋弧状　沈線	〃	〃
	G	横位＋弧状＋斜位　沈線	〃	〃
	H	横位＋縦位＋斜位　沈線	〃	〃
II 地文のもの	I			a．縄文 b．無文(ミガキ)
	J			a．縄文 b．無文(ミガキ)

体　部

分類		体部文様表現の種類	地文
I 沈線により文様構成をするもの	A	横位　沈線	1．縄文 2．無文　ミガキ
	B	斜位　沈線	無文(ミガキ)
	C	弧状　沈線	縄文
	D	横位＋縦位　沈線	無文(ミガキ)
	E	横位＋斜位　沈線	1．縄文 2．無文(ミガキ)
	F	横位＋弧状　沈線	無文(ミガキ)
	G	縦位＋弧状　沈線	〃(〃)
	H	斜位＋縦位　沈線	〃(〃)
II	I	刺突	
III 地文だけのもの	J		縄文

底　部

分類	底部形態	底面
I	平底	a 網代痕 b 無文
II	上げ底	
III	台付	

地文だけのもの(Ⅲ類)に大別された。Ⅰ類はA～Hまで細分された。Aは地文に縄文が施されたもの(ⅠA_1)と無文でミガキ調整されているもの(ⅠA_2)がある。

底部は形態によりⅠ～Ⅲ類に大別された。Ⅰ類は底部に網代痕のあるもの(Ia)がある。

＜年代＞

北沢遺跡から出土した弥生土器は口縁部がⅠ、Ⅱ類、体部がⅠ,Ⅱ類に大別され、それらはさらにいくつかの種類に細別された。これらの出土状況を検討すると、ほとんど第1区の第Ⅱ層中から出土し、共伴している。しかし、既に述べたように第2層は二次堆積の可能性が指摘されているので、厳密な意味での共伴関係とはいえない。ただ、これらの土器群は文様や文様表現技法の上で共通した点が多い。特に沈線文による文様はすべて一本工具で描かれており、強いまとまりがみられる。したがって、これらは、いくつかの時期のものが混在したと考えるよりは、比較的限定された時期のものと考えたい。

次にこれらの資料について、従来の研究成果と比較し、検討してみたい。

口縁部についてはA、Da、E、J類が蔵王町大橋遺跡(藤沼邦彦：1971)から出土している。またG類は蔵王町欠遺跡(白鳥良一：1971)、Da類が名取市西野田遺跡(宮教委：1974)から出土している。体部についてはA、C類が蔵王町欠遺跡(白鳥：1971)、B、D類が大橋遺跡(藤沼：1971)から出土している。これらの編年的位置づけはいずれも円田式とされている。一方口縁部のB、C、F、H、体部のE、F、G、H、Ⅰについては他に類例はみられない。しかし、これらについては本遺跡において、各群の土器がいずれも第Ⅱ層中で共伴していることから、以上の土器群はすべて、「円田式」の範中に収まるものと考えたい。また、底部資料についてもⅠ類、Ⅱ類が第Ⅱ層から出土していることから同期のものと考えてさしつかえないと思われる。

(3)石器

石器の種類には石鏃(有茎、無茎)、石錐、石匙、不定形石器などの剥片石器と石鏃、磨石などの礫石器が出土している。その他剥片、石核なども数点出土している。これらの石器については、現在のところまだ整理が進んでいないため、特徴のあるものを図版に示すにとどめた。第1区第Ⅱ層のものについては、「円田式」の土器が共伴している。したがって、第Ⅱ層出土の石器群については、「円田式」期のものと考えられる。

(4)土師器

土師器は竪穴住居跡と表土から出土している。表土出土のものについてはすべて細片で特徴は認め難い、したがってここでは一応、住居跡出土のものを中心に述べてみたい。

＜分類＞

坪には製作にロクロを使用していないもの(A)と使用しているもの(B)がある。さらに、器形の特徴と器面調整から次のように細分された。

A類　体部から口縁まで全体的に内弯ぎみに外傾し、口唇部がさらに外傾する。底部は平底である。器面調整をみると、外面は口縁部から体部上半までヘラミガキ、体部下半はヘラケズリである。内面は、ミガキと、黒色処理がなされている。

B類　ロクロを使用し、体部から口縁まで外傾するものである。すべて、内面がヘラミガキと黒色処理がなされている。底部の切り離し手法、調整の違いにより次の3種類に細分できる。

B－Ⅰ類　底部から体部下端にかけて軽い手持ちヘラケズリのあるもの(切り離り手法は不明である)

B－Ⅱ類　底部の回軽糸切痕がわずかに見えるほどの軽いヘラケズリで、底部から体部下端にかけて、縦方向の手持ちヘラケズリのみられるもの。

B－Ⅲ類　切り離しが右回転糸切りによるもので再調整はないもの。

B－Ⅳ類　ロクロを使用し、高台付のものである。体部から口縁部までややふくらみをもって外傾する。底部には、ロクロ右回転糸切痕を残し、内面にヘラミガキが施されている。

甕は製作にロクロを使用していないもの(A類)と使用しているもの(B類)とに大別される。A類は器形からさらに次の2つに分かれる。

A－1類　頚部から口唇部にかけて強く外傾するもの。

A－2類　頚部から口唇部にかけてゆるやかに外傾するもの。

A類は体部に「ケズリ」調整がなされ口縁に「ヨコナデ」が見られる。

なおA－2類については、鉢に近い器形であるが、ここでは甕に含めて分類した。

B類は大きさから2つに分かれる。

B－1類　大型のものB－2類　小型のもの

〔出土状況における組合せ〕

土師器には坏と甕があり、坏は5種類甕は4種類に分類された。これらの出土状況をみると、坏にはA類(ロクロを不使用)を出土する住居跡(第3住居跡)とB類(ロクロ使用)を出土る住居跡(第1・2・4住居跡)がある。両者の住居跡における甕のあり方を見ると甕A類(ロクロ不使用)と甕B類（ロクロ使用が混在した姿をとっている(第2・3住居跡)

第12表　住居跡における土師器の出土状況

			第1住居跡	第2住居跡	第3住居跡	第4住居跡	第5住居跡
坏	A				1		
	B	I		1		1	
		II		3			
		III	4	1			
		IV	1				
甕	A	I	2				2
		II		1	2		
	B	I		1	1		
		II					1

〔年代〕

坏についてはロクロ不使用のもの(A)と使用のもの(B)とに大別された。Aは土師器の型式編年において陸奥国分寺跡出土のものを標式とする「国分寺下層式」(氏家和典：1967)(工藤・桑原：1972)(小井川和夫・高橋守克：1977)に類例をみる。またBは土師器の編年において表杉ノ入貝塚出土資料を標式とする「表杉ノ入式」(氏家：1957)に類例をみる。

以上のことから坏Aは「国分寺下層式」期(奈良時代)、坏Bは「表杉ノ入式」期(平安時代)に属するものと考えられる。

甕については現在のところ明確な型式編年はなされていない。したがってここでは、坏との共伴関係を示すにとどめたい。

(5)須恵器

住居跡および第1層から出土しているがすべて破片で実測図を作成できたものは少ない。そのうち第14図－7は、第2住居跡から土師器B類と共伴していることから所属時期は平安時代と考えられる。

坏の底部破片は、いずれも平安時代のものとされている糸切痕を底部にもつもの(岡田茂弘・桑原滋郎：1974)である。他の破片についてはいずれもロクロ使用痕がみられるが明確な特徴はみられず、土師器との共伴関係からとらえたものでないため所属時期は明らかでない。

(6)赤焼土器

器種は坏で2点出土している。ロクロ製作で、ロクロから切り離しの後再調整を加えていないものである。これまで須恵系土器(工藤・桑原：1972)、あかやき土器(小笠原好彦：1976)

として論じられてきた土器群に類似する。これらの年代については現在、平安時代後半に位置づけられている(岡田茂弘也：1973)。本遺跡においても、この赤焼土器は第1住居跡において、平安時代に属する「表杉ノ入式」の土師器と共伴している。ここでは、広く平安時代に属するものと考えておきたい。

(7)その他の遺物

鉄製紡錘車、砥石が各々1点出土している。ともに第2住居跡の床面から出土し、土師器B類と共伴しているところから平安時代のものと考えられる。

4. 遺構の性格と年代

(1)土壙

土壙については、先に使用痕跡から4種類に分けた。この中で、①～③タイプは、焼けた痕跡の認められるものである。④タイプは、焼け面の認められないものである。焼け面の認められるものは、さらに①タイプの堆積土上面と底面の一部に焼け面が認められる。②、③タイプの底面、側壁に焼け面の認められるものがある。

①タイプは、堆積土上面が焼けている。これは、この上面で直接に火を使用したものと考えられる。焼面の状況は、住居跡でみられる炉跡のような使用痕跡を示しているところから、住居跡の炉跡の底面の一部とも考えられたが証明する資料はみられなかった。

②、③タイプは、壁面及び、底面は焼けているが、①タイプほどではなく暗赤褐色である。さほど火熱を受けていないことを思わせる。このような、底面および壁面に焼けた痕跡を持つ土壙については、亘理町宮前遺跡(宮教委：1975)などに類例が見られるが用途については不明である。

④タイプは、堆積上中に木炭や焼土が含まれるが、用途は不明である。

次に土壙の年代を検討してみたい。土壙の確認面は、第Ⅱ層(第1土壙)、第Ⅳ層(第7土壙)、第Ⅲ層(第10土壙)、地山面(第2～6土壙、第8、9土壙)である。第1土壙～第7土壙の検出された地区に見られる第Ⅱ層は前述した如く「円田式」の土器を含む層であり「円田式」期もしくは、それ以後に堆積した二次堆積層と考えられた。

10基の土壙の中で、第1土壙、第4土壙、第6土壙の堆積土から弥生土器の口縁部破片ⅠAb類が出土している。また、第7土壙の堆積土から付加縄文施文の弥生土器が出土している。他の6基の土壙から遺物は出土していない。

このような状況から第1、第4、第6、第7の土壙の年代は、周辺に分布する第Ⅱ層が「円田式」期の遺物を含む層であることや、土壙から出土する遺物によって弥生時代の可能性があると考える。他の土壙の年代については不明である。

(2)住居跡

第1住居跡～第5住居跡の床面、カマドより出土している土器によって住居跡の年代を推定したい。なお、分類可能な資料については第12表に示した。

その結果、「国分寺下層式」の土師器は第3住居跡で出土している。「表杉ノ入式」の土師器は、第1住居跡、第2住居跡、第4住居跡で出土している。このことから、第3住居跡は「国分寺下層式」期に、第1、第2、第4は「表杉ノ入式」期に属するものと考えられる。

なお、第5住居跡については、実測図を作成できる土師器の坏はなかったが、カマドから坏B類の破片資料が出土している。したがって、本住居跡については「表杉ノ入式」期の可能性がある。

5. 遺跡の構成

北沢遺跡は、針生地区の南から北西方向にのびる谷の両側の比較的平担な斜面に立地し、特に北斜面の舌状小丘陵上に立地する。

縄文時代

北沢遺跡のもっとも古い遺物としては、「素山Ⅱ式」の土器が第Ⅰ層～第Ⅱ層で出土している。縄文時代の遺構は確認できなかったが、縄文時代に北沢遺跡において人々の活動が何らかの形で開始されたものと考えられる。

弥生時代

弥生時代の遺物としては、土器・石器が発見されている。遺構としては土壙が検出され、さらに、弥生時代の遺物を含む層が確認された。弥生時代の土壙と考えられるものは、西側斜面の1基、東側斜面の3基で計4基である。弥生時代の遺物を含む層は、南側斜面と東側斜面に堆積していた。この層に含まれる土器は、一本工具による沈線によって描かれる文様をもつものが多く、これらはいずれも「円田式」に属するものと考えられた。

この時期の竪穴住居跡などは確認できなかったが、この頃の人々が北沢遺跡において、何らかの活動をしていたことがうかがえる。

奈良～平安時代

奈良～平安時代の遺構としては、竪穴住居跡5軒が発見された。いずれも遺跡の南斜面から確認されており、立地の規則性がうかがえる。これらの住居跡はカマドを伴っており、石組により構築されたものが多い。

6. まとめ

今回の調査の結果を要約すると次のようになる。

1. 本遺跡は、縄文時代、弥生時代･奈良～平安時代の複合遺跡である。
2. 弥生時代の遺構と考えられる土壙が4基検出された。いずれも焼けた痕跡をもつものであ

る。その他、弥生土器を含む層が検出されたが、これらの土器はいずれも「円田式」に属するものである。

3. 奈良～平安時代の住居跡が5軒発見された。

引用・参考文献（引用順）

宮城県教育委員会(1976)：「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集宮城県教育委員会

村田町史編纂委員全(1977)：『村田町史』

佐々木安彦(1972)：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報－東足立遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第25集宮城県教育委員会

小牛田町(1970)：『小牛田町史』（上）

小牛田町教育委員会(1975)：『山前遺跡』

藤沼邦彦(1971)：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報－大橋遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第24集宮城県教育委員会

白鳥良一(1971)：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報－欠遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第24集宮城県教育委員会

宮城県教育委員会(1974)：「東北新幹線関係遺跡調査報告書1」『宮城県文化財調査報告書』第35集

氏家和典(1957)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

工藤雅樹・桑原滋郎(1972)：「東北地方における古代土器生産の展開」『考古学雑誌』第57巻第3号　日本考古学会

小井川和夫・高橋守克(1977)：「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城史学』第5号　宮城教育大学歴史研究会

岡田茂弘・桑原滋郎(1974)：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』１　宮城県多賀城跡調査研究所

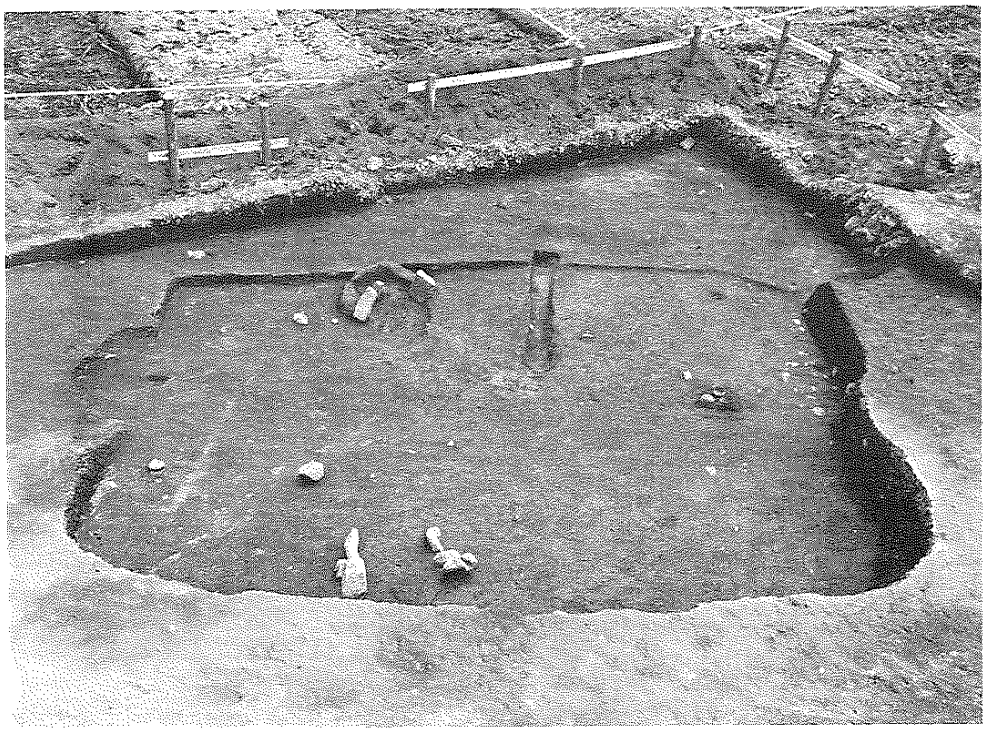
小笹原好彦(1976)：「東北地方における平安時代の土器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』

岡田茂弘也(1973)：「宮城県多賀城跡調査研究所年報1972」『多賀城跡－昭和47年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所

宮城県教育委員会(1975)：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第38集

宮城県文化財保護課職員一覧

課　長		千葉与一郎	調査第１係	技術主幹兼係長	後藤　勝彦	調査第２係	係　長	佐々木氏楨
課長補佐		木村三智夫		技術主査	高橋　多吉		技術主査	平沢英二郎
管理第１係	係　長	加藤　忠雄		〃	早坂　春一		技　師	後藤　彪
	主　事	矢口セツ子		技　師	小井川和夫		〃	佐々木安彦
	〃	三浦　正義		〃	高橋　守克		〃	加藤　道男
管理第２係	主幹兼係長	扇　正人		〃	丹羽　茂		〃	一条　孝夫
	主　事	佐藤　信子		〃	斎藤　吉弘		〃	阿部　恵
	〃	渡辺　正憲		〃	佐藤　好一		〃	手塚　均
				〃	遊佐　五郎		〃	阿部　博志
				〃	千葉　宗久			
				〃	真山　悟			
				嘱　託	熊谷幹男			
				〃	中島　直			

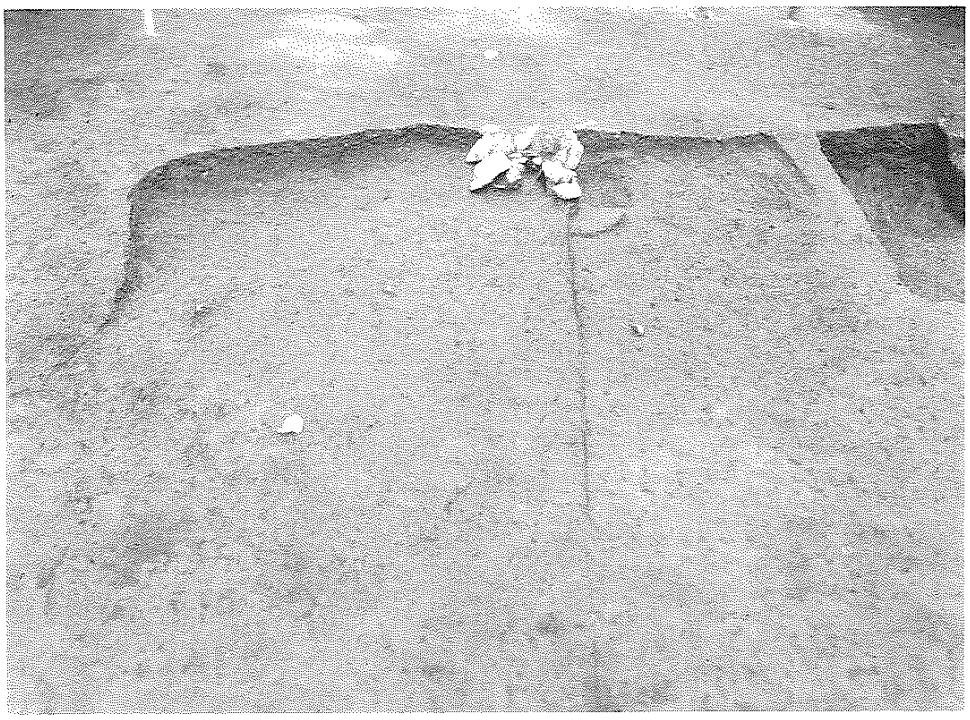


第１住居跡

写真１　　第２住居跡

第 3 住居跡

写真 2　　第 4 住居跡



第 5 住居跡

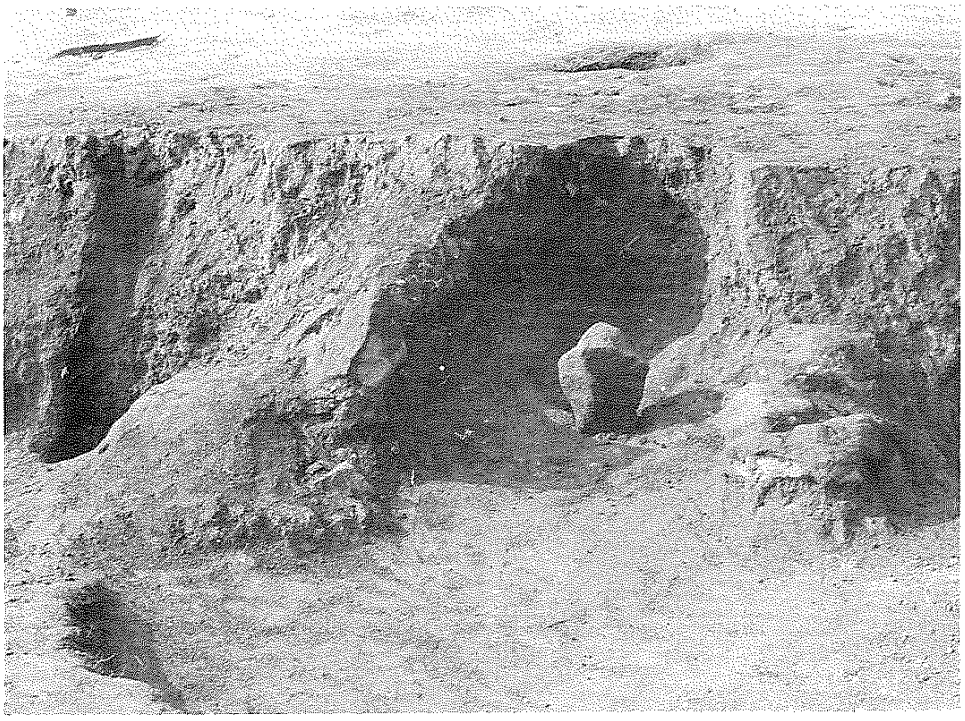


写真 3　　第 2 住居カマド

第３住居カマド

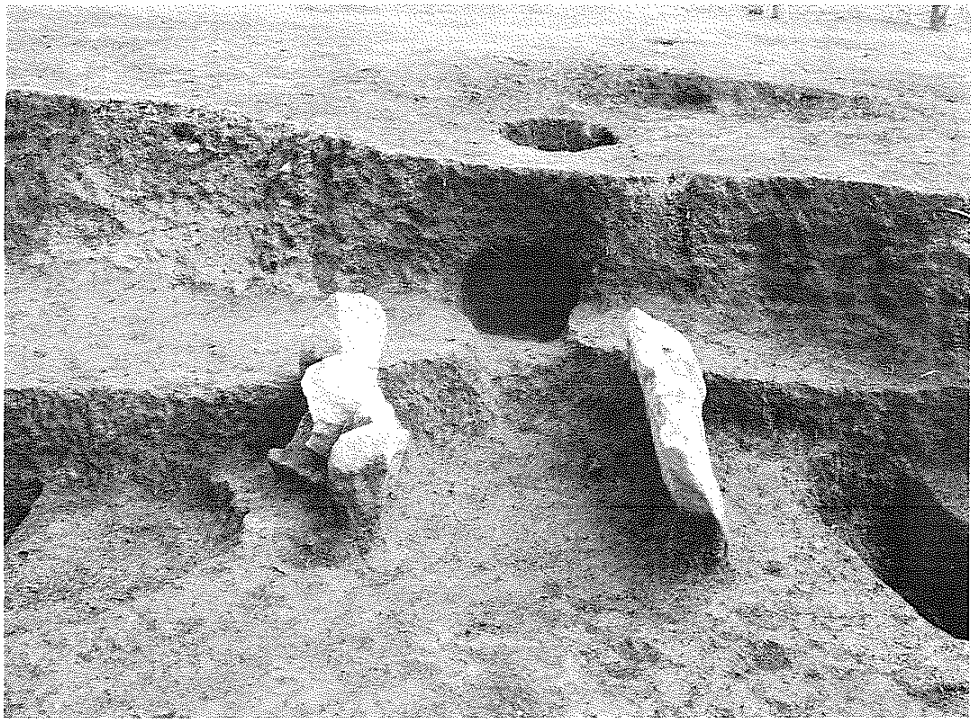


写真４　　第４住居跡　カマド

第 1 土壙

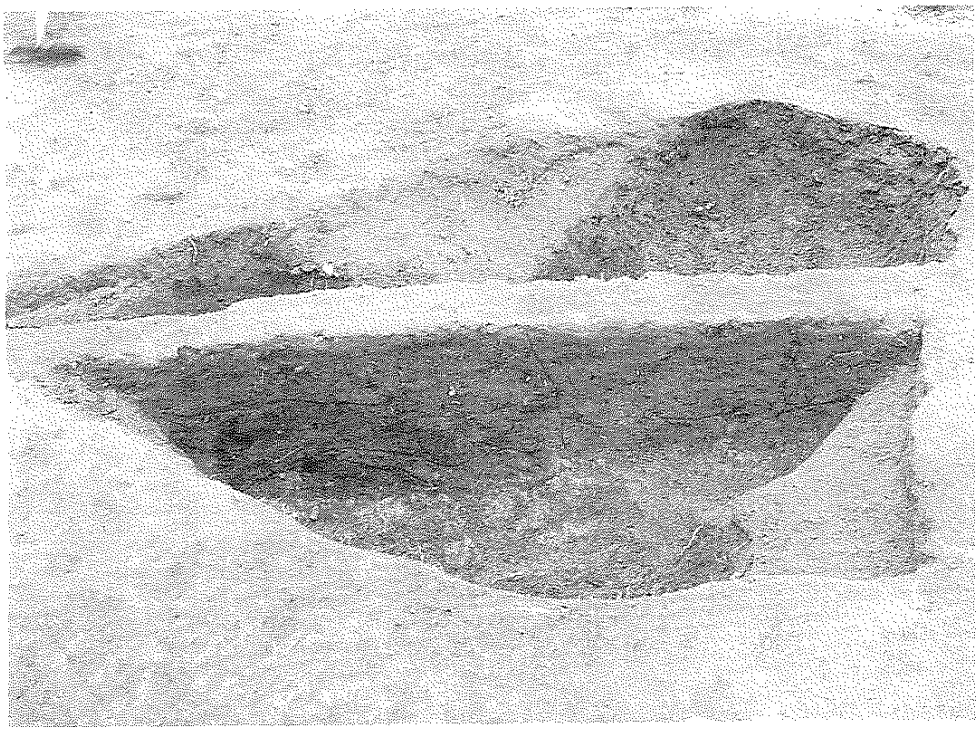
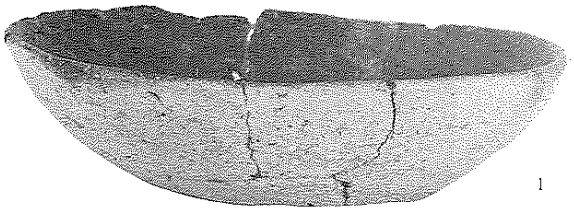
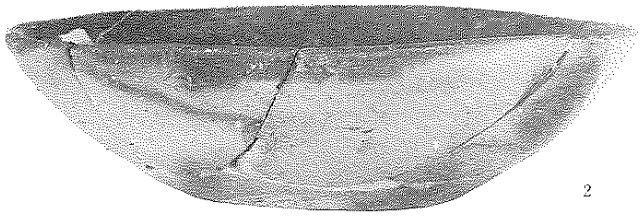


写真 5　　第 7 土壙(上面)

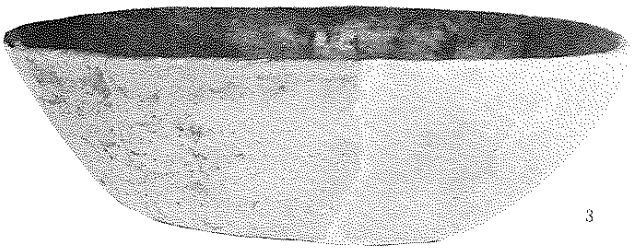


1

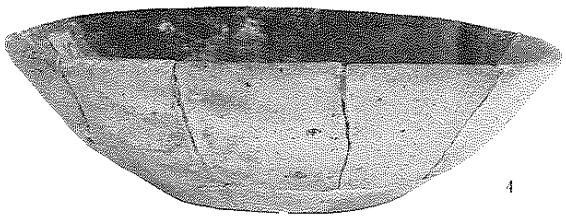
6



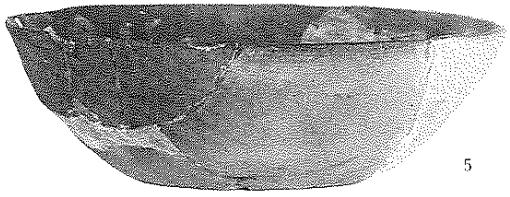
2



3



4



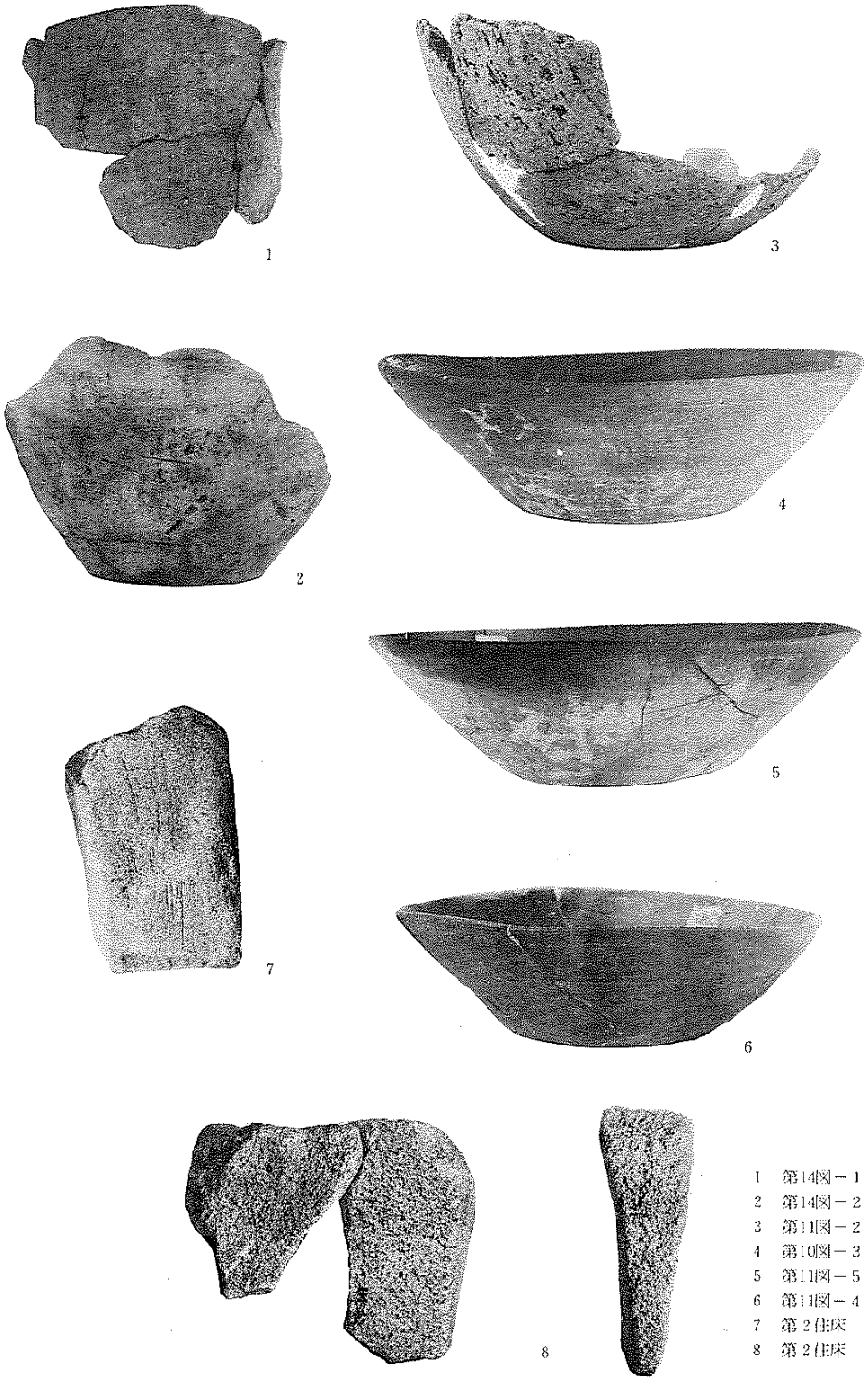
5

1　第16図－1
2　第13図－4
3　第13図－1
4　第10図－6
5　第13図－3
6　第20図－4

写真 7　住居跡出土土師器坏

1 第20図－2
2 第20図－1
3 第16図－2
4 第20図－3
5 第10図－6
6 第13図－7
7 第14図－3

写真 8　住居跡出土土師器



1　第14図－1
2　第14図－2
3　第11図－2
4　第10図－3
5　第11図－5
6　第11図－4
7　第2住床
8　第2住床

写真9　住居跡出土土師器(坏・甕)砥石・赤焼土器

1

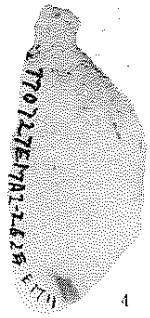
AM－162－II

2

AM－110－II

3

AJ－162－II

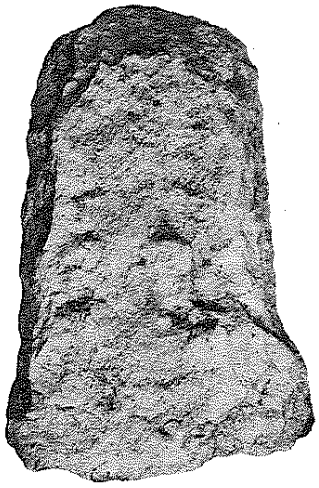


4

AJ－126－II

5

AJ－113－II



6

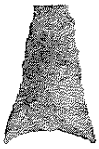
AJ－109－II

7

AJ－171－I

8

AJ－115－I



9

DB－225－pit

10

AH－109－I

11

DB－225－pit

12

AS－176－I

13

AJ－140－II

写真10　第I・第II層出土石器

写真11　遺跡航空写真（↓印遺跡）

発掘後の記念写真